

# ろうきん森の学校 10周年記念シンポジウム

これからのCSRを考える  
～企業とNPOが目指すべき協働のあり方～

## 実施報告書







## ご挨拶

労働金庫連合会 50 周年記念社会貢献活動として 2005 年 10 月に開校した「ろうきん森の学校」は、おかげさまで 10 周年を迎えることができました。2015 年 2 月 12 日には、日本財団ビルにて、10 周年記念シンポジウムを開催しました。

これまでご支援くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

「ろうきん森の学校」は、日本の里山再生をテーマに、労働金庫連合会が活動資金を支援し、NPO 法人ホールアース研究所を主管団体として実施する環境教育事業です。福島（いわき市）、富士山（富士宮市他）、広島（北広島町）の 3 地区で

- ①森を育む（植樹、間伐・下刈り等の森林整備活動）
- ②人を育む（森づくりや環境教育リーダーの育成）
- ③森で遊ぶ（里山を活用した自然体験・環境教育プログラムの開発と実施）

という 3 点を活動の柱として位置づけ、現地の NPO が軸になり、地域の皆さんと共に多様な取り組みを展開してきました。

地域の実情に応じた柔軟な展開が実を結び、この 10 年間の森づくり活動や自然体験プログラムへの参加者は延べ 11 万 6,000 人を超え、活動は広がりを見せています。

こうした成果に鑑み、この度「ろうきん森の学校」は、労働金庫連合会 60 周年記念社会貢献活動として 2015 年度からの 10 年間で「第Ⅱ期」と位置づけ、新潟（南魚沼市）および岐阜（美濃市）の新たな 2 地区を加えた合計 5 地区で、「森づくり」から始まる「人づくり・地域づくり」につなげる環境教育を、さらに発展させることを目的として事業を継続することになりました。

これから先の 10 年、日本の森林や中山間地域は、これまで以上に過疎化・高齢化の影響を受け続けることになるでしょう。私たちの役割は、過去 10 年間の成果と課題を整理しつつ、これからの日本の社会に求められる視点をしっかり盛り込んだ質の高い活動を、地域の方々や労金関係者、現地 NPO と共に推進していくことだと考えております。

日本各地に森づくりの輪が一層広がり、森での活動を通じて人と地域が健全に育まれる社会を構築すべく、多くの皆さまのご支援を賜りながら、「ろうきん森の学校」はこれからも歩みを進めてまいります。

2015 年 3 月

ろうきん森の学校全国事務局  
(NPO 法人ホールアース研究所)

## 基調講演「ローカルベンチャーが地域を変える」

牧大介氏（株式会社 西栗倉・森の学校 代表取締役） 講演要旨

### 1. ローカルベンチャーとは

ローカルベンチャーが地域を変えるというテーマで、岡山県の西栗倉村という小さな村の取り組みをご紹介します。ローカルベンチャーというのは、地域の可能性を探していくベンチャーのことです。このローカルベンチャーを群れのように地域の中で増やしていくことをテーマにしています。ベンチャーといっても、いわば「アドベンチャー（冒険）」のようなものでして、いろいろハラハラすることもたくさんあります。しかし、地域の中にまだまだ可能性があるのではないかと思います。

課題を探すことと可能性を探すことは表裏一体で、また、誰かが何かを始めないといけないわけです。でも誰かが始めるということが難しいんです。動けば課題が見えてきますが、課題は自分たちだけでは解決できません。いろんな方から知恵をいただき、連携しながら取り組もうとやってきました。そうして自然と仲間が増えていき、いわば更地から木が生えて、森が育っていく。多様性と連携がある地域の姿が、西栗倉村で活動する中で浮かび上がってきていると実感しています。

### 2. 住みたいと思える場所をつくる

西栗倉の話をする前に、そこにつながるであろう、これから私が仕掛けたいと思っていることを先に話します。私はいろいろな地域の方から、地域を再生してほしいというコンサルタントの依頼も受けます。地域を再生させるためには、雇用を創ることが必要だね、という話になるのですが、そもそも仕事がないので、仕事を生み出す人が必要となります。つまり、起業していく人材を育てていかないとどうしようもないんです。

そんな中、最近分かってきたのは人間も生き物なので、いい巣（家）があれば、勝手に住んで課題を解決して何とか生きていこうとする、ということです。乱暴な言い方になりますが、住みたいと思える（人も含めた魅力ある）家があることが重要なのではないかと。

京都の美山で始めたプロジェクト「株式会社 野生復帰計画」は、ほとんどが自分で「野人」と言っている猟師のグループで、移住者の支援を行っています。自然と向き合う時間をたくさん作っていく生き方・暮らし方を実践する人がそこにおいて、その上で住みたいと思える場所がある。それさえできれば、地域は放っておいても良くなるのではないかと、思っています。



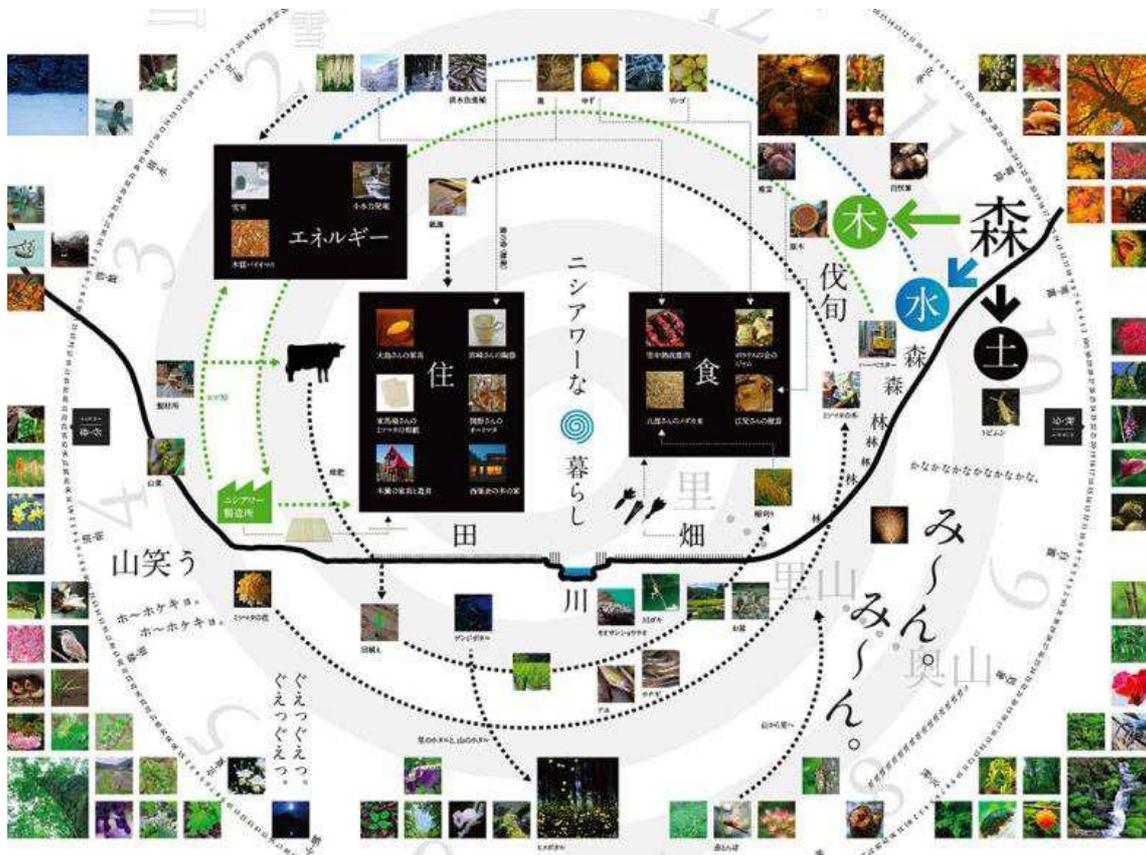
牧大介（まき だいすけ）氏

1974年、京都府生まれ。京都大学大学院（森林生態学研究室）修了後、三和総合研究所（現在 三菱UFJリサーチ&コンサルティング）を経て2005年アマタ持続能経済研究所を設立し所長に就任。主に農山漁村における新規事業の企画・プロデュースを手掛ける。

2009年2月に（株）トビムシ設立に参画し取締役就任。現在は2009年10月に岡山県西栗倉村において地域商社である（株）西栗倉・森の学校を村役場と（株）トビムシの共同出資により設立し代表取締役に就任。

### 3. ニシアワーという時間

西栗倉の話に戻ります。始めるにあたって「ニシアワー」という、西栗倉での時間をテーマに掲げました。四季が巡る1年1年の積み重ねの中で、森が豊かになり、様々な関係性が豊かになり、自然の恵みを商品にすることで価値に変え、その中で人が暮らしていく。余剰があればお客様と分かち合っていく、そんな地域の在り様をこの図で表現しました。



森の学校という会社を立ち上げ、軌道に乗せていくことを一生懸命続けていく中で、皆結構忙しくて、田んぼ畑に手が入りにくいことがあります。暮らしていく中で、ちゃんと自然とも向き合っていかなければならないと考えています。

### 4. 都市の疎開先となる住宅をつくる

今、考えているのは、自給自足的な営み自体が稼ぎにもなる、自然と向き合うことでスキルを高めることが稼ぎにつながる、ゲストハウス付の移住者向け賃貸住宅です。これは仕事を創るというチャレンジをする中で見えてきた、別の課題解決へのチャレンジです。都市部で比較的資金に余裕のある人にオーナーになってもらい、そこに月3万円くらいの家賃で野人と呼ばれる人に住んでもらいます。万一、大きな災害等があった場合は、オーナーにはここに避難してもらうのですが、既に自然と関わりながら暮らす人がいますので、おそらく食べ物とエネルギーの確保は大丈夫だろうと思っています。究極的には疎開できる場所とその価値と関係性を持つことが、西栗倉村の次の段階だと思っています。

西栗倉で目指してきたことは、自然が豊かで、人間同士の関係性も豊かで、その上でそ

れなりのお金もあるということです。ビジネスを通じて、貨幣を通した価値の交換が行われ、地域でどれだけの価値を生み、享受できるか。田舎で暮らす中で貨幣が入る部分は意外と一部だなど感じています。ここでは、自給や物々交換で価値を享受できることが結構あります。でも、やっぱり営みそのものも一部お金を生むものであったほうが良いということで、安くてセルフビルドで建てられる家を考えています

森の学校では木材加工もやっており、丸太をどうすれば合理的に加工できるか専門家と協議しながら進めています。

## 5. ローカルベンチャーによるスイミー作戦

人口 1,530 人の西栗倉村は、2014 年に転入超過になりました。ただ、自然減が 10 人くらいあるので、転入超が人口増にまではつながっていません。移住者が増えた結果、ここ数年の子どもの数は毎年 15 人くらいになっています（以前の 2-3 倍）。移住してくる人は冒険好きの人が多くせいか、肉食系の人が多いように思います。遊ぶ場のない西栗倉村で若い男女が生活すると意外に子どもは多く生まれます。これまで 50 人余りが移住し、12 社ほどが起業し、その年間売り上げは概ね 7 億円くらいです。

ローカルベンチャーでは、大きな規模を追いかけるのではなく、ニッチなビジネスをたくさん創っていかうと考えています。たくさん個性的な取り組みが地域を創っているわけです。これをスイミー作戦（注：個の集合体をつないで大きな力にする）と呼んでいます。

森に例えれば、大きな大木もあれば、小さな木もある。生態系として成り立っていることが大切です。数億円規模の人を雇える規模の事業があると、そこで育った人がスピンアウトして別の事業を始めます。私たちの森の学校を卒業（退職）して、起業した人が 4-5 人います。創業後 5 年くらいで 4-5 人に退職されると経営としては大変ですが、もともと地域にチャレンジする人を育てていかうと立ち上げたので、それはそれで良かろうと思っています。

結果として、地域の間伐が進んで森が豊かになり、地域の中で連携が強まっていき、お金もまわるようになっていく。こういう豊かな地域にお客様が集まってくるのではないのでしょうか。

## 6. 誰かが始めるから始まる／合意形成はその先にある

西栗倉では、誰かが始めたから始まったわけです。よく「地域内で合意が得られない」と言われますが、大多数が「いいんじゃない」と言われることは、ほとんど失敗します。それはクリエイティビティがないからだだと思います。創造とか革新と呼ばれるものは、たいてい社会的合意が得られないものです。合意があるから始まるのではなく、誰かがリスクを取って始める先に合意が形成され、より大きな動きにつながります。

西栗倉で誰が始めたのか。それは 2006 年に生まれた國里さんが始めた、(株)木の里工房木薫（もっくん）がローカルベンチャー1号です。私は立ち上がる現場にコンサルとして立ち会いました。勤めていた森林組合を辞めて、保育園・幼稚園向けの家具を製造販売していく会社を立ち上げました。今、年間 10 か所くらいに納品しています。スギやヒノキの家具は柔らかくて大人向けの家具には向かないと言われていますが、そうし

た性質は子ども向けにはプラスに解釈されます。地域にある針葉樹の可能性を見出して、家族や家のローンがあるのに脱サラして起業したわけですが、こういう捨て身の挑戦をする人が身近に出てくると巻き込まれてしまいます。私も気がついたら西栗倉で仕事をするようになっていました。それが國里さんのおかげで忙しくなりすぎ、自分が企画して立ち上げた会社も自分が代表をすることとなり、1億円くらいの借金の連帯保証をしています。

## 7. 村の協力者／旗を掲げる

國里さんが起業した時に、これはチャンスだと思った人が村で1人だけいました。役場の関課長でした。村で新しい会社が生まれるということがここ何十年なかったため、これから何かが生まれるのでは、という期待がありました。そこで移住者の受け入れと企業支援を行う、通称「村の人事部」と呼ばれる雇用対策協議会を立ち上げました。これは森の学校の前身に当たります。移住者を受け入れて、育てていこうということが元々の目的です。

この雇用対策協議会が主導する形で、2008年に「100年の森構想」という旗を挙げました。結構大雑把なものですが、とにかく50年諦めずにがんばろうぜ、というものです。村長のメッセージとしてウェブで発信されていきました。未来に向かって、私たちはこういうことを大事にしていきたいということを、言う・言わないの差は大きく、旗を掲げていることで森の強い思いのある人が、ジワジワと西栗倉村に集まってきました。この100年の森構想は、雇用対策協議会が中心となりながら旗として掲げています。

50年前に植えた森を諦めずに50年間育て続けることができたなら、村全体が豊かな森になっているはずです。夜にはヒメボタルもたくさん見られます。こんな夢を共有する仲間が地域内外で増えています。

## 8. 出資という形の新しいコモンズ

一方で、夢を語るだけでは実現しないので、具体的な役割分担や契約など世知辛い部分も詰めていかなければなりません。地域の中だけではできないので、出資していただくという形で個人からお金を出していただき、林業に活用するために使っています。そして収益を、配当として出資者に10年間かけて返しています。1口5万円から出資いただき、匿名投資組合という方法をとっています。全国から423人の出資者を集めました。このように、開かれた森づくり、新しいコモンズ、外部からの応援者も含めた大きなコミュニティの中で、西栗倉の森を再生させていこうとしています。

売る商品もない状態、何も動いていない状態で、「やるぞ！」という宣言をしてお金を集めるという乱暴なスタートでしたが、お金を出してくれる方が出てきたので、これはやり遂げないと仕方がないということになり、地域の側にも責任感が生まれました。出資いただいた方には実際に現場に見に来ていただきました。出資することで西栗倉の応援団になっていただいた方で、村に移住してベンチャーを立ち上げた方もいらっしゃいます。

## 9. 気の遠くなるような数の地権者への対応

2007年に雇用対策協議会を立ち上げた後、移住者第1号が木薫に入ったのですが、翌年リーマンショックがあり、2009年の冬には工場の音が全くなくなりました。人を雇ってこれから行くぞ、と思っていた矢先です。仕方がないので、保育園・幼稚園に絞って全員で営業をかけました。危機を乗り越える時に組織は強くなるんだなと思います。その後、初めての黒字を出すなど、急激に業績は回復し、今では売り上げは2億強くらい、10人ほどの人を雇える会社になっています。

外部の力も借りて、地域の森を再生していこう、となるのですが、3000haくらい管理しなければならない森があり、10年間で間伐を一通りするには300ha/年くらい必要です。一方、山の地権者は1300人おり、筆数は6000に分かれています。これだけでも気が遠くなるような状況ですが、役場では3人体制で、1300人の地権者に10年間かけて総当たりするという決心をしました。ところがその後、担当者が辞めてしまい、どうしようかという時に、神奈川県の実業職だった女性を説得して移住してもらうことになりました。これは、という人がいた場合に、果敢に口説きに行くということを何度か行いました。

## 10. 森の学校の設立と人材育成

森の学校は2009年に雇用対策協議会の中に、プロジェクトチームとして発足し、同年10月に会社登記し、2010年4月から業務を開始しました。最初のメンバーに当時25歳だった人がいます。今は営業部長となっていますが、最初は何の経験もありませんでした。その中で家を建てるという責任を持たされて、いきなり木材加工とか建設のこととか分からないまま、誰かがやったことがあることはできるだろう、ということで当たってもらいました。その後、木材加工のインフラが村内に必要だということが分かったので、工場を建ててもらいました。さらに経験のない人を10人ほど雇って工場を稼働させました。ほとんど暴挙と言われ、実際経営は大変でしたが、一生懸命やるうちに面白い商品が生まれてきました。

一番のヒットは「ユカハリ」というフローリング材の商品です。賃貸住宅でも使える、木のタイルカーペットです。住宅向け商品は飽和しており、価格競争での勝負となっていましたので、競争相手のいないところに飛び込もうとしました。5000枚/月くらい販売しています。オフィスの内装も手掛けており、5年後には2000万円/月くらいを売り上げるまでに成長しています。

私は人の育て方はよく分からなくて、やっていることは乱暴で「できるはずだ」と言い切ってやらせてみて、死にそうになっているところで頑張れと言っています。ある意味、落とし穴を掘っておいて、そこに落ちるんですが、それは私がいい話しかしないんですね。「こんな事業したら面白いと思わない？」とか。

冷静に考えたら危ないこともあるし、簡単にいかないこともいっぱいあります。ただ、初めからそんなこと考えていても仕方がないので、穴に落ちてもがいているなら頑張れと声をかけて、資金が足りないなら集めたりします。

## 11. ローカルベンチャーの事例

これまで西栗倉村に移住して起業した人は様々です。ヒノキを使った家具づくりや、食用油の製造・販売、日本酒の出張販売から醸造に取り組み始める人もいます。森の再生に取り組む西栗倉ですが、田んぼ・農業の再生に取り組むベンチャーも出てきました。また、木質エネルギーを販売するベンチャーは、それまで年間 2000 万円以上、燃料代として支出していた村の温泉施設を、地域の木材を利用することで燃料代を約 1500 万円に抑えて、地域経済にも貢献して行くという挑戦をはじめています。

一方、一緒に森の学校を立ち上げた役場職員は、早期退職をして 60 歳で障害者支援の NPO を立ち上げました。木材加工場などで障害者の方に働いてもらっていますが、丁寧に仕上げてもらっています。こうすることで、コストを下げつつ、品質も上げています。

このように、いろいろなチャレンジが生まれてきています。こういう会社があるんだったら、俺はこういう会社ができるんじゃないか、ということで地域の中で関係性の密度がこれから高くなっていくのではないのでしょうか。

## 12. 身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ

2008 年からスタートして 50 年後の 2058 年、起業した若者は 70 代から 80 代になっています。たぶん生きているでしょう。でも中には亡くなっている人もいるでしょう。亡くなってしまった人の想いや、蓄積してきたもの、それらを大切に受け継ぎながら、地縁・血縁というよりは、本当に受け継ぐべきものを積み重ねながら未来につながっていった時に、2058 年には村全体で夢に向かって、無数のローカルベンチャーが活動しているのではないのでしょうか。

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」という言葉があります。何かワクワクして捨て身のチャレンジを始めてしまった人に引っぱられて、また捨て身のチャレンジをしていく人が出てくる。そういう人を見ているのが面白い、とお客さんも増えてくる。このような連鎖反応の中で、どんどん夢に近づいていくのではないのでしょうか。

2058 年、生きている人みんなが集まって大同窓会をしたいですね。私は生きているかどうか微妙ですが、既に亡くなっている人はヒメボタルになって出てきてほしいですね(笑)。

みんなが 50 年先を目指そうということで夢が共有でき、喧嘩もしますが、そこに向かっていろんな課題も見えてきて、それを解決していく。その過程で仲間が増えていく。そういう積み重ねの中で、この地域は自然が豊かで、人との関係も豊かで、それなりにお金もあるよ、というところになっていけばいいなと思って、西栗倉村に関わっています。

皆さんの参考になれば幸いです。

本日は、ありがとうございました。

以上



## ろうきん森の学校 10周年記念シンポジウム

これからのCSRを考える

～企業とNPOが目指すべき協働のあり方～

記録（発言要旨）



- 📅 日時：平成27年2月12日（水）16:00～17:00
- 📍 場所：日本財団ビル 2階 大会議室
- 👤 パネリスト（敬称略）
  - 牧 大介（西粟倉・森の学校代表取締役）
  - 町井則雄（日本財団総務部企画推進チームリーダー）
  - 志賀誠治（NPO 法人ひろしま自然学校代表理事）
  - 糸谷元志（労働金庫連合会総合企画部長）
- 👤 コーディネーター
  - 田中啓介（ろうきん森の学校全国事務局）

田中：皆さん、こんにちは。本日は企業・行政・NPO・学生と様々な立場の方にご来場頂いています。「これからのCSRを考える～企業とNPOが目指すべき協働のあり方」が今日のテーマですので、まずは現時点でのCSRを考えることから始めましょう。今、企業やNPOはどんな課題を抱えているのか、両方の立場に深く関わっていらっしゃる町井さんに口火を切って頂きたいと思います。

町井：東日本大震災の前後で世の中が大きく変わったと思っています。私が「CANPAN」を立ち上げたのがちょうど10年前ですが、2003年が日本のCSR元年と言われており、その2年後でした。

この時の問題意識としてあったのは、NPOがやっていることをきちんと社会に対して情報発信できていないために、社会的信用力はもとより、NPOが行っている様々な価値を社会が理解することができない、というものでした。それを何とかできないかと思って、NPOと一緒に立ち上げたのがCANPANでした。

その2年後、「CANPAN CSRプラス」というサイトを立ち上げました。これは東証一部上場企業を中心とし、企業が取り組んでいるCSR活動情報があまりにも拡散しすぎているため、調査してまとめるサイトを立ち上げました。

その後、2008年にリーマンショックがあり、アメリカのブルームバーグという情報会社から連絡がありました。これは、日本の企業が世界の機関投資家から注目されているが、社会を裏切らない長期的な投資ができる日本企業がよくわからない、だから情報を提

供してほしい、というものでした。

こうした流れがある中で、2011年に東日本大震災が起きました。震災前後で大きく変わったのが、企業とNPOの協働の取り組みです。ここで課題として挙げられるのが、企業側では、NPOの理解が十分でないこと、NPO側については、企業ときちんと対話ができる状態のNPOが数少ない中で震災が起こってしまったことです。世の中では、両者が一緒に取り組むことで何か生まれるという期待がありましたが、うまく合っていないというのが今の状態だと思います。

今、企業のCSRに求められている世界的な潮流は、マテリアリティ（重要性）の設定というのが間違いなくあります。今まではCSRというのはいろいろなこと（コンプライアンス、社会貢献、環境活動等）をやらなければならない、とされていますが、企業が生き延びていくために何がより重要か、優先順位をつけなさいということなのです。その中で、例えばコミュニティでの課題解決に取り組むというような時にNPOと組む必要が出てくるわけです。



町井則雄氏

田中：企業もNPOも「自分たちがやっていることをきちんと社会に発信できていない」という本日1つ目の課題が浮

かび上がりました。町井さん、これはまだ解決できていないという認識で良いでしょうか。

町井：はい、そう思っています。

田中：それに加えて企業側では、NPO への理解がまだ足りない。一方 NPO 側では、企業と同じ土俵の上で企業側の言語を使ってきちんと対話できる NPO がまだ少ない。従って企業と NPO のマッチングがなかなか進んでいない、というご指摘が 2 つ目の課題でした。

さらに、企業も NPO も特にどの社会課題に取り組んでいくかという優先順位づけができていない。従って、どの地域・どの企業・どの NPO と組んでいくかが明確になっていない、これが 3 つ目の課題でした。こうしたご指摘を受けて糸谷さん、感想をお聞かせください。

糸谷：本業にもかかわることですが、私たち労働金庫は非営利の金融機関となっています。そういう意味では NPO と共通する部分もあるはずですが、ですが失礼な言い方になりますが、10 年前 NPO はなんか胡散臭いじゃないか、という議論が内部にはありました。しかし、ろうきん森の学校で一緒に取り組んだ NPO は、互いに顔が見える関係になっています。

実は、ろうきんは株式会社には融資できませんが、NPO には融資できるんです。ところが、実際 NPO に融資をしようということになると、財務状況など審査することになるのですが、NPO があまり慣れておらず「なぜそんなもの出さなきゃいけないんだ、だったら借りずに何とかする」ということになったりもします。まだまだ双方

の理解が十分でないと思います。

2 点目の情報発信について、これは NPO に限らず私たち自身も不十分な点があると思っています。NPO と協働で 10 年間取り組んでいますが、十分社会に発信しきれていないと感じています。こうした CSR の取り組みを発信する、宣伝するということは、どこかおこがましいという思いもあり、これまでなかなか取り組めていませんでした。しかし、今日牧さんの話を伺って、私たちの事例が他の地域で取り組もうとしているけど躊躇している NPO や金融機関に「よし、やってみよう」と思わせることもあるんだろうなと思いました。そうした点でも、もっと情報発信に力を入れていくことが重要だと。



糸谷元志氏

田中：やはり NPO 側からの発信が弱い、NPO が自分たちのことを企業側の言葉で語れていないというご指摘でした。一方で、企業側も自身の取り組みを発信しきれていない、さらには何か広告宣伝めいてしまうのではという不安や後ろめたさもあるというご発言でした。では、志賀さんに伺います。NPO 側にはどのような課題があると感じていらっしゃるでしょうか。

志賀：NPO 一般でなく、あくまで私の NPO でというお断りの上ですが、情報発信

力が弱いというのは皆さんおっしゃる通りです。一方、10年前にろうきん森の学校を始める前は企業との接点はほとんどなかったのですが、始めるに当たり、地元の中国ろうきんの担当者がいろいろ企業に挨拶回りに連れて行って、その縁でつながった企業が結構あります。一度森の学校のプログラムに参加していただくと、その後も長く付き合うことになることが多いです。

振り返ってみると、そうしたつないでくれる方頼みで、自分たちで積極的につながりを創っていくことは弱かったと思います。なぜそうなってしまうのか。NPOをやっている人たちはミッションで動いているところがあって、どちらかというと積極的にPRをしていくというより、自分たちのミッションに共感してくれるパートナーを待っているという部分があると思います。

また、企業との連携で一番ギャップがあると思っているのは、スピード感の違いではないでしょうか。NPOはミッションを掲げてそれにじっくり取り組んでいくというのに慣れていて、企業はいつまでにこれを達成するというので、スピード感が違います。ここに大きなずれがあります。これが同じ言葉で語れない点ではないでしょうか。



志賀誠治氏

3番目の優先順位の件、NPOでもいつも考えています。ただ、優先順位を付けた上でも、自分たちに今できることから取り組むので、なかなか優先順位通りに取り組めていないという実態があります。私のNPOについて言えば、組織の脆弱性が課題の根本にあると思います。

田中：やはり、企業・NPO、双方ともに情報発信という大きな課題があるということですね。この点について、先ほどの西栗倉の事例は、活動の理念や関係者の情熱を分かりやすく伝えている素晴らしい事例だと思います。牧さん、情報発信のポイント、日々意識しているコツをぜひ教えてください。

牧：そうですね、私たちは売り上げを伸ばしていかなければならない、そのためには知っていただかなければならない、ということでBtoC（企業と消費者の取引）の部分強化しています。間に流通が入るとなかなか利益が取れません。大手の流通に乗せようと思うと上代（定価）の3割以内にしないとのせてもらえません。今は、ほぼ上代の7割に抑えることができていますので、販売経費を抑えて、ものづくりにかかる経費（材料費、人件費等）に充てることができるようになってきました。しかし、そのためには情報発信に充てるコストをかけざるを得ない。ただ、それぞれにかけられる経費も少ないので、森の学校が情報発信のハブになり、村全体のブランド価値を上げていくことに積極的に投資をしていく。

森の学校が扱っている商品には材料となるものもあり、村内企業の売上が増えれば、結果的に森の学校の売り上げ増につながっています。森の学校が

リスクを取って情報発信すると、回りまわって回収できるという流れを設計した上で積極的に取り組んでいます。

現状では売り上げに対して 3%くらいを広告宣伝費として使っています。創業時は売り上げに対して 30%くらいが広告宣伝費でした。創業時から 3-4 年は赤字を垂れ流しの状態でした。ピークでは 8000 万円くらいの赤字を出していました。その翌年から 2 年間で 9000 万円くらい収支を改善しています。要はリスクを取らなければならないこと、それを回収できる方法を作ること、取るべきリスクはしっかり取りきる。そうすることで情報発信のコストが回収できる。しんどいけど、ここはやらなければならないことだと思います。



牧大介氏

田中：志賀さんに伺います。情報発信にコストをかける、という意識の NPO はそれほど多くないように思いますが、志賀さんのところはいかがですか。

志賀：ほとんどかけていないです。私の NPO は小さいですし、先ほどの話の通り、声掛けをしていただいたところと組む、というスタンスです。可能性は考えますが、牧さんの話にあった「リスクを背負う」という覚悟ができ

ていないんだと思います

田中：町井さん、NPO には情報発信にコストをかけられないということですが、町井さんが 10 年前に立ち上げられた CANPAN は、無料で情報発信ができますよね。このあたり、少し忸怩たる思いがおありではないですか。

町井：そうですね。広報や物をセールスするということは同じだと思います。でもお金があるから成功するというわけではないですよ。CANPAN は非営利であれば無料で使えます。これを立ち上げた際、社会実験をしたいと思いました。その 1 つがデザインにこだわったです。CANPAN には無料のブログ機能があり、その機能を使って社会にどこまでアピールできるかということを試してみました。

ブログ上で 3 つの団体を立ち上げました。1 つ目は「日本クールビズ協会」です。クールビズという日本の環境関係の中では知られた言葉ですが、この言葉を「自分自身をブランディングする」と位置付け、「クールでカッコいいビジネススタイルで新橋を埋め尽くす」などという訳の分からないコンセプトで作りました。ブログで発信しているうちにとある百貨店から、クールビズの戦略を一緒に考えてほしいという依頼が来て、やれば伝わるんだと思いました。

2 つ目は「日本スイーツ協会」です。立ち上げた理由は、スイーツ好きが社会性に目覚めるきっかけを作ることでした。同じ百貨店がクリスマスシーズンに何か社会性のあるキャンペーンをやりたいと相談がありました。

3 つ目は「日本雨女・雨男協会」というものです。これが最大のヒットなんで

すが、ここで訴えたかったのは、日本の水問題、特に農業に絡む水問題だったんです。日本は水資源が潤沢ですが、世界ではそうではなく、20世紀は石油の世紀だったが、21世紀は水で戦争が起こると世界銀行が警鐘していると言っても誰も聞いてくれません。そこで目を付けたのが、雨女・雨男と呼ばれる人たちです。この人たちにとって、雨を降らせることはネガティブな要素ですが、「あなたが持っている雨を呼ぶパワーは世界的に見たらとっても社会的に意義ある力です」というと嬉しくなって、勝手に宣伝してくれるんです。今では、国内に6支部あり、会員がどれくらいいるか把握しきれないくらいです。四国の研究者に広告効果を試算してもらったところ、10億円以上の効果があるそうです。

これら3つとも、すべて広告宣伝費としてはタダです。今、ソーシャルネットワークワーキングの時代は、お金があるかでなく、知恵があるかにかかっています。NPOもうまく活用できれば企業に、より知ってもらえることができるのではないのでしょうか。ただし、その時に重要なのがやはりデザインで、地域のデザイナーといかにうまくつながるかがポイントになります。

一方、企業側についてですが、先ほど糸谷さんから、「社会貢献活動を宣伝すると後ろめたい」という発言がありました。むしろ逆で、企業には説明責任があります。自社が何のためにあるかというミッションを掲げているだけでは自分事に社員に落ちてきません。社会のためにこれを行うことで、持続可能性がでてくるということを積極的に明らかにすることで、社員も納得するし、株主の納得も得られます。陰徳を積むということではなく、積

極的に発信することは、絶対に今後の社会にとっていいことだと思います。

田中：お金がなくても知恵によってちゃんとデザインされれば、発信できるということでした。志賀さん、そうはいつでも、例えば地域のデザイナーさんとながらうためには、やっぱりお金も必要になるということはないでしょうか。

志賀：そうだと思います。が、先ほども言った通り、私たちのNPOはミッションに共感して一緒にやってくれる人が、協働の仲間だと思っています。仕事としてやっていくにしても、根底にはお金だけでない、ミッションを共有している点がないと難しいとも思っています。

田中：志賀さんが言われた「共感を巻き込むための発信力」は、牧さんが講演の時におっしゃっていた「スイミー作戦」（注：自立した個の集合体を作り、つながることで大きな力となる）につながると思います。西栗倉はみんなの共感を生む、発信力やデザイン力が強いと思いますが、工夫していること・意識していることはありますか。



コーディネーター 田中啓介

牧：私自身が、コピーライターの的に文章を出していることが多いです。創業当時から今もそうですが、よそ者という立

場です。今でも住民票は西栗倉になく、単身赴任で来ています。ですから、未だに田舎の人間でもない、都会の人間でもない、中途半端な境界にいるのが、自分の立場だと思っています。両方の立場が分かる中で、どう発信していくのかということを考える際、「イタコ」だと思っています。村の中で共感性の高いメッセージが自分の中に乗り移ってどう出せるか。そういう共感性の高いものを持っている人になりきった時に、どう出せるか。

また、グラフィックに落とす前に、できるだけ人に響く言葉を丁寧にひねり出す作業をしています。初期のころは何十人という村の人にヒアリングをして、村の歴史とか、森に関わった人の思いを聞き、自分の中でいったん消化して言葉に落とすという、地道だけど大切な作業だと思っています。新しい地域に出かけて行く時は、できるだけ丁寧にヒアリングをするようにしています。5-10人くらいの様々な世代のライフヒストリーを聞くと、だいたいその地域の様子が立体的に見えてきます。こういう目に見えてこない作業を大事にすることは大切です。

田中：言葉の力による発信ですね。糸谷さん、企業の発信力にもつながるお話だと思いますがいかがでしょうか。

糸谷：その通りだと思います。企業が発信することで広がっていくんだということを意識することは必要だと思います。それと、ちょっと観点外れますが、志賀さんの話のなかでありましたが、ろうきん森の学校の3地区の中で広島地区が、ろうきんと協働は早かったんです。これは地域の事情や、NPOの歴史にも絡むことですが、そ

れぞれのNPOが皆違う、ということを企業側もきちんと理解する必要があります。

ろうきん森の学校については、3地区のNPOはそれぞれ違って、ホールアース自然学校は自然学校の草分け、いわきの森に親しむ会は退職者が中心となった取り組み、そしてひろしま自然学校は、人材育成中心の活動となっています。正直言って、最初の頃NPOは皆同じと思っており、そこが誤解の元でした。

最後にもう1つ。この私が着ている青いつなぎ服には思い入れがあります。これは私にとっても部下にとっても「非日常」の象徴です。こう見えて、日ごろは難しい顔や偉そうな顔をして仕事をしています。ただ、あのおやじが休みの日になると青いつなぎを着て作業をやっている、そういうことを見せることでNPOの方と同じ目線で作業をすることを伝えていけているかなと思っています。

田中：先ほどから情報発信が課題であるとして、議論を重ねてきました。共通項として見てきたのは、知恵をどう使うかということです。この点、SNSなどの発達によって外部の知恵もうまく使えるようになってきています。さらに出てきたキーワードが「共感を得られる仲間をいかに増やせるか」ということでした。そのためにはまず、言葉を一生懸命紡ぐことが必要だと。言葉を大切に重ねていくと、西栗倉のように分かりやすいブランディングができていく。企業もNPOも、自分たちのブランディングによって双方の距離感が少し縮まるのではないかとのご指摘でした。

続いて、もう1つのテーマを考えて

みたいと思います。糸谷さんの後段のご発言にありましたが、糸谷さんのような上司を持った部下は、おそらく志賀さんのところで出てきた企業にNPOを紹介して回るような、熱い人になるのではないのでしょうか。

町井さんに伺いますが、いかにリスクを背負って社会課題に真剣に取り組む人を育てるかという点について、お考えを聞かせてください。

町井：育てるという文脈で申し上げると、20-30代で社会貢献につながる仕事をしたいという人は確実に増えている一方、最大の課題は私も含めて、中間管理職にあります。経営層が「原点に帰って社会貢献活動をしよう」と部長・課長に下してきても、彼らは日々数字に追われていて大変です。そうすると他人事になってしまうのです。一方、若手はやってみたいと思っている。この経営層と若手の間にある層、CSR担当者曰く、粘土層と呼ぶそうですが、この粘土層をブレイクスルーすることは経営層もなかなかできないし、若手層も崩せない。このことが最大の課題ではないかと思います。

ですから、若手をどう育てるかというよりも、彼らがチャレンジできる道筋をどう作れるかがポイントです。糸谷さんのように現場にどんどん出ていく管理職が増えるといいですね。

田中：粘土層を崩すためには経営層の「やってみなはれ」的な精神、任せるといふ度量の大きさが必要になってくるということですね。糸谷さん、中江理事長もいらっしゃる前で言いにくいかもしれませんが、ろうきんさんほどのような雰囲気なんではないでしょうか。

糸谷：労働金庫という組織は、もともとそういう雰囲気・土壌はあったと思います。ただ、ろうきん森の学校を始めた当時は「なんで金融機関なのに森づくりなんだ」という反応はあったし、今もあります。

はじめた当時、理事長が環境省OBで、環境省の事業を受託していたホールアースを紹介してもらったという縁があります。NPO全体としてはちょっと胡散臭いという思いもある中で、ここなら大丈夫だろうということで広がっていきました。10年前手探りで始めていきましたが、やったことによって我々も鍛えられ、結果的にのべ11万人以上の方が参加して、世の中の役に立ったということになっています。改めて10年間続けてきたからこそだと、ここは確信しています。

田中：志賀さん、10年間ろうきんさんとお付き合いされてきて、担当者の熱意をどう感じ、それがどう変化してきたとお感じですか。

志賀：まず10年間という期間について、NPO側にとってはありがたいです。先ほどスピード感について話しましたが、半年とか1年単位で結果を求められるのではなく、10年間支援を担保すると言ってくれたおかげで、長期的な計画をもって取り組む事ができたのはすごく大きかったです。

それから、10年間ろうきんをはじめ、企業の方と関わってみて感じることは、協働ができるということは、組織対組織というよりも担当者対担当者。協働する組織の担当者の方とどれだけ共感ができるかというのが意外に大きいと思いました。

これからのろうきん森の学校に関し

て言えば、具体的なフィールドがあることが強みと思っています。室内での人材育成もいいですが、実際にフィールドに来てもらい、一緒に参加する中で対話が進み、新しい価値を産み出したり、お互いの共感性を高めたりできるのではないのでしょうか。ですから、ろうきん森の学校の次の10年はフィールドで協働するという考えが大切だと思います。

田中:企業も人材を育てなければならない。人材育成のノウハウを持つパートナーとしてNPOはアリだという、新しい協働の可能性の1つだと感じました。牧さんに伺います。先ほどのご講演で、落とし穴に落ちて這い上がってくることを応援するという例がありました。人を育てる方法論としてどのようなものがあるのでしょうか。

牧:「孫子の兵法」に書いてありますが、「戦地に兵士を送る際、悲観的な情報は与えなくてよい」「死ぬか生きるかギリギリの状況に追い込んでこそ人は生きる」と書かれていて、僕はそれを実践しています。

田中:楽観的なことを言い続けて、どんどん落とし続けるということでしょうか。

牧:そうですね。だいたいそれでひどい目にあうのですが、それを自己責任だと言い放って這い上がってくると、「あの時は穴に落とされてよかったと思います」と。

田中:決して精神論だけではないと思いますが、先ほどの「やってみなはれ精神」に通じますね。町井さん、人を育てるという観点で、企業とNPOをご覧に

なっていて感じることはありますか。

町井:東日本大震災が与えたインパクトの例を紹介します。ある企業の社員が大勢ボランティアで現地に行っているんです。その中で自社がなぜ存在しているんだらうということを考えるようになったそうです。こういう現場で感じて考えた人が粘土層＝中間管理職になった時の変わりようは大きいと思います。今、資本主義の弊害から、原点回帰しようとする中で、東日本大震災の現場を知っている人たちが権限を持った時に世の中は動く気がします。阪神淡路大震災がボランティア元年と言われたように、今度は企業がNPOと共に現場を作れるようになってくるのではないのでしょうか。特に教育・人材育成という面で、NPOの存在は大きいと思います。

田中:糸谷さん、今のお話で、現場を体験した人にどんどん任せていくことは、企業にとってもリスクを負うことになると思いますがいかがでしょうか。

糸谷:今すぐ任せる、ということは障害があると思います。ただ、1つエピソードをご紹介しますと、最近部下の結婚式がありました。ろうきん森の学校のいわきの現場に何度も行っている職員で、結婚式の中で生まれてから今までのプロフィールが写真で流されました。その中にろうきん森の学校の活動の写真が2枚出てきました。これは嬉しかったです。職員にとって自分が育ってきた中でそれがインパクトを与えた体験だったわけです。こうした結婚式で紹介された例がこれまで何件かありました。将来、彼らが中間管理職になった際に粘土でなく、もう少し流動的になると私たちの組織も

活性化するかなと感じています。

田中：後半の議論、人材育成については、  
どんどん現場体験者に「やってみなはれ精神」で任せることが企業に求められているのではないかという点がご指摘がありました。また、そうした場を NPO と一緒に取り組むという新しい協働のあり方もあるのではというポイントも出てきました。

最後に、志賀さんからご指摘のあった、企業と NPO との間のスピード感のギャップについて伺います。糸谷さんに伺います。10 年間という長い期間にわたって NPO と一緒に取り組むというのは大きな決断だったと思います。労金連としてはどのようなお考えだったのでしょうか。

糸谷：率直に言うと、長く続けることが当時のトップの意向でもあったわけですが、環境分野の取り組みというのは我々の本業ではないので、つつい木を植える等の一過性の取り組みに流れがちですが、それで終わらせてはいけないとは思っていました。逆に、長く続けてこそ、我々素人が関わる意味が出てくるのではないだろうか、という議論が当時あったそうです。

もう 1 点、お金の話で世知辛いですが、単年度ごとに支援していると、どうしても業績で資金が少なくなる年があります。これは非営利とはいえ、私たち労金連も同様です。実際途中でリーマンショックがあり、大きな影響を受けました。しかし、ここで業績が悪化したから今年度は支援を控えさせてもらいたい、と言ったら NPO としては計画的に進められません。最初から 10 年間継続すると決めたことは良かったと思います。また、だからこ

そ、次も 10 年間継続することを決めました。

田中：町井さん、他の CSR 活動の取り組み事例で、10 年間継続しているという事例はありますか。

町井：テーマごとに 10 年間継続しているという事例は知っていますが、同じ団体に 10 年間継続しているというのはおそらく初めてのケースではないでしょうか。その理由は組織形態にもよりますが、株主総会で「まだ同じ団体に支援し続けているの」という指摘が出てくると思います。関連している NPO に継続支援している事例はありますが、利害関係のない NPO に継続しているのは素晴らしいと思います。なぜなら社会課題は数年で解決しないからです。しかし、3 年程度で支援を打ち切って、他団体に変えているうちに、お金を出すことが目的となってしまって、課題解決に結びついていないことがあります。

経営層にこうした点を改めてほしいと訴えていますが、株主に理解してもらえないと言われます。でもそれは株主が理解していないというよりは、株主にきちんと説明していないからではないかと思います。社会課題を解決するためには 10-20 年というスパンが必要で、企業の長期計画と一緒に考えていく必要があります。その意味において、ろうきん森の学校の取り組みは、他の企業に勉強してもらいたい取り組みだと思います。

田中：牧さん、西栗倉は 100 年の森構想に象徴されるように、非常に長いスパンで皆と同じ夢を見る、ビジョンを描く大切さを日々実感されていると思

います。長いスパンで物事を見ていくということについて、どのように感じていますか。

牧：我々の場合、相手が森や地域です。ですから、2-3年で地域を変えますと言うと、どう考えても嘘に思えます。逆に50年かけてやりますと言ったほうが、リアリティがあります。難しい問題ほど、長期戦で取り組むほうが良いのですが、冷静に考えれば長期戦を戦うのは大変です。でも、50年間あきらめずに続けられたら、その先にどんな将来があるだろう。そう考えると結構ワクワクして、みんな穴に落ちちゃうんです。難しい問題ほど長期戦で考え、将来できるかもしれないと考えて、短期的な課題解決のために一歩踏み出してみる。そういうことかなと感じています。

田中：町井さんがおっしゃっていましたが、本気で企業もNPOも社会課題解決に取り組むのであれば、それが2-3年で終わるはずがないということですね。また、牧さんがご指摘されましたが、社会課題が明確であればあるほど、長いスパンでどう一緒になって歩んでいけるか、なぜこと一緒に取り組むのか、毎年株主に対して説得していく必要があります。NPOは企業に対して、「自分たちと組むことでこういう貢献・社会還元ができる」ということを、株主総会で説明する役員と同じ立場で説明していかなければならないわけですね。ここができて初めて、真の協働になるのではないかという気がします。時間が少なくなりましたので、一度会場から質問を受け付けます。

質問者：牧さんの発表を聞いた後で、ろうきん森の学校の各NPOの報告を聞いて

て、大きな違いを感じました。要は、事業性という点を各NPOの皆さんはどう見られますか。

志賀：NPOにはそれぞれ持分とか個性があると思います。私たちのNPOは、教育活動を事業化していくことが強みです。良質のプログラムを作ってそれを売れるようにしていく、という意味ではうまくいっているんじゃないかと思っています。

ただ、地域連携という視点でみると、現状は私たちの実施する教育活動に地域の方にゲストティーチャー的に参加していただくというレベルでとどまっているのが、次の10年間を考えると一番大きな課題だと思います。

牧さんたちは地域全体を巻き込んで取り組んでいますが、私たちは限られたフィールドの中での教育活動にとどまっている。今後は地域の文脈を踏まえた地域課題の解決をめざして、地域全体を巻き込んだ活動へと展開していく中で、そこから事業化の可能性が生まれるような検討を求められているというように理解しました。

田中：社会課題解決に中長期的なスパンで取り組まなければならないという点でいうと、NPOも継続性、すなわち事業性を高めて取り組んでいかなければ本物ではないということですね。そういう意味において、ろうきんさんが取り組んでいる社会的責任投資の観点から、支援しているNPOが投資足りうる存在なのか、もし足りないのであれば、どこが足りないのかということ、金融機関の厳しい目からご指摘いただく。こういうことも新しい協働なのではと感じました。最後に本日のテーマである「企業とNPOが目指

すべき CSR のあり方」について、出しておきたいキーワードを一言ずつお願いします。

糸谷：「人を育む」です。ろうきん森の学校の3つのテーマのうち、このテーマは私の中では大きなポイントだと思っています。これは森を育む以外の点にも通じますし、10年間取り組む中でいろいろ勉強してきました。社会に対してこの取り組みを広げることで、みんなで育てていく機会を提供していきたいと思っています。

志賀：いろんな活動支援の場面で使われる言葉に「C&CからE&Eへ」というのがあります。C&Cというのは、Command (指令) & Control (統制)。一方が相手方に「こんなことをしなさい」という指令を出して、そのことがちゃんと遂行されるように統制していくというやり方。一方のE&Eは、Empower (権限移譲) & Energize (元気づけ)。現場に実施権限を任せて、現場が行っていることを支援し、元気づけていくというやり方です。

10年間を振り返った時に、労金連からいただいた活動支援というのは、まさに「E&E」ではなかったかと感じています。細かく工程管理や指示が出てきたのではなく、それぞれの地域やNPOに合ったことをやってもらえればよいということでした。こうした姿勢を今後も貫いていただくことが、ろうきん森の学校の次の10年の発展につながると考えます。

町井：社会課題はわかっているにもかかわらず次々に噴出してきます。より深刻化、多層化、複雑化してきます。こうした課題に取り組むプロフェッショナルはNPOの人

たちで、これからも第一線に必要なだと思います。私の言っているNPOは、ボランティアではなくて非営利であるというだけの話で、事業性を含め、課題解決のプロフェッショナルであってほしいと思っています。NPOの課題解決モデルを全国展開できる力を企業は持っています。課題の気づきと解決手法の開発はNPOが行い、それを企業が横展開していくことが今後起こってくると思います。

国や行政機関は税金を使って課題解決に取り組んできましたが、立ち行かなくなっていることが多い今、どんどん民間をサポートする側に回っていただければと思います。社会課題の解決を企業とNPOが協働してビジネスで取り組むことがどんどん増えていくことを期待します。

牧：僕は妄想することが大事だと思っています。楽観的で妄想癖が強いのでいろいろな方に迷惑をかけています。森の学校の取り組みの先にこんな世界が実現できたらな、というのを個人個人が持っているのは妄想ですが、何人かで話すうちにそれが構想になっていくんです。そうなった時に、そこに向かう時に何が課題なのか、何を解決しなければならないのかということが見えます。大事な課題を見つけるためにも皆さん、是非妄想していただきたい。

田中：4者の皆さんと一緒に考えてきたパネルディスカッションでは、情報発信、人材育成、中長期的スパンなど、様々なキーワードが出ました。この中に、皆さん自身がこれから取り込まれるCSRのヒントがあればいいなと思います。牧さんのお話の中で50人の移住者から12のローカルベンチャーが生

まれましたとありました。率にすると 20% を超えています。今日ここにお集りの 80 人くらいの皆さまから、16 件くらいの新たな協働が生まれることを期待します。

最後にパネリストの 4 人に盛大な拍手をお送りください。ありがとうございました。

以上

## ゲストパネリストからのメッセージ

### ローカルベンチャーを育む土壌について

西栗倉・森の学校 代表取締役 牧 大介

その場所（ローカル）に存在する資源から価値を創出するベンチャー企業のことを、ローカルベンチャーと呼んでいます。中山間地はどこも過疎化・高齢化がますます深刻化してきていますが、その悪循環から脱却するためにはローカルベンチャーが群れをなして増殖して行く必要があると考えています。仕事がないと嘆いていても何も始まりませんので、地域に眠っている可能性を掘り起こし価値を創出していくローカルベンチャーを立ち上げ、仕事を自ら生み出す挑戦者が不可欠です。西栗倉村では、2006年以降に設立されたローカルベンチャーは10社を超えており、その結果70名以上の雇用が新しく創出されています。

では、どのような条件を整えば、ローカルベンチャーの群れが増殖していくのでしょうか。もっとも重要なことは、まず誰かが挑戦を始めることです。誰かが始めるから始まるのです。ローカルベンチャーの群れを増殖させていくということは、たき火を行うことに似ています。種火がおきるから、それが周囲に広がっていて、大きな勢いのある火になって、それが地域を変える力になっていきます。西栗倉村では、(株)木の里工房 木薫という会社を立ち上げた國里さんという人が火種になりました。たき火をするんだという意味を持った人もいなくてはなりません。ただ種火があるだけでたき火は起きませんから。西栗倉村では、役場の方が、國里さんが火種になりえると考えて、燃えそうな焚き木（起業家型人材）を集めるチャレンジを始めました。そのために立ち上げたのが雇用対策協議会という組織です。地域の中だけでは、起業家型人材の確保は困難でしたから、Iターン者を集めることにしました。そのために、村にある空家の所有者と交渉して、移住者のための家の確保も進めました。

人材を発掘するためには、村としてのビジョンも明確に掲げる必要があります。「百年の森林構想」というビジョンが掲げられることになりました。ビジョンを明確に掲げ、そのことで村のファンになる人を増やしつつ、村に移住する人材を募ることも進めたのでした。國里さんに続くことになった初期の挑戦者たちは、一本釣りではひっばってくるが多かったです。公募をして見つかるというものでもありません。初期のメンバーの質の高さが、後の流れに大きく影響します。そこまで行くと、あとは勝手に流れができてローカルベンチャーの増殖が始まります。起業して頑張っている人が周囲にいると、もはや起業するということが特別なことではなくなってきました。あいつがやれるなら俺も・・・という意識もだんだん醸成されていきます。

とにかく仕事が必要で、仕事を生み出す挑戦者が必要だと考えてきました。これは半分ただしくて、半分間違っているということが最近になって分かってきました。圧倒的にボトルネックになっているのは「家」だったのです。田舎にはたくさんの空家があると思われていて、それも事実なのですが、質の高い借りることができる空家は実際のところほとんどありません。これからローカルベンチャーの群れを増殖させていこうとするのであれば、真っ先に家の確保を考えるべきでしょう。創意工夫を重ねながら自らの暮らしを創造していくことができそうな、質の高い住空間が必要です。完成された家というよりは、DIYで手を入れて行くこともできる創意工夫の余白が十分に用意された家があれば、クリエイティブな人材が集まりやすいと思います。

## これからの CSR を考える上で、企業が NPO との協働を進めるためのポイント

日本財団総務部企画推進チームリーダー 町井則雄

自社の CSR を考えていく上で、NPO と協働を進めていくべきポイントは大きく二つあります。一つは、「社会貢献事業」の一環で NPO を寄付先として選ぶという方法です。これはスキームとしてはわかりやすいもので従来型の協働方法の一つです。単に寄付をするだけでは「協働」と呼べない場合も多いものの、企業が社会貢献に関わっていく手法の一つとしてはハードルも低いこともあり、今後も重要な役割を果たしていくでしょう。この場合、企業にとっては消費者との共感共有(イメージ戦略)や地域との関係づくりなどに活用できるというようなメリットがあります。ただ、この場合に企業として注意しなければならないのは、一回ずつの寄付を様々な寄付先にまんべんなく行うというやり方をしないことです。なぜそこに寄付をするのかという戦略やストーリーが無ければそもそも社会から共感を得ることはできません。寄付先の選定は大変ですが、少額でもきちんと成果目標を設定した上で複数年にわたって同じ NPO に支援し続けるほうが成果を含めて WIN-WIN の関係を築くことができます。

もう一つは、21 世紀型と呼べるような手法になりますが、「事業の協働パートナーとしての NPO」という位置づけです。この場合の「事業」には二つあり、一つは「非営利型事業(社会貢献に近いもの)」で、もう一つは「営利事業型」です。NPO は、名前のおり非営利組織ですが、収益事業を行うことができます。むしろ事業収入を増やすことによって、社会課題の解決と同時に自分たちの組織経営を安定させるという点において、多くの NPO が今後、取り組むべき領域です。これらは企業にとって新しい事業創出、最近の言葉ではソーシャルイノベーションなどと呼ばれる領域へと事業進出する際に大きな意味を持ちます。

企業は今後、このような戦略的協働を NPO と考えていくことが自分たちのサバイバビリティを上げる要素の一つとして成り立ち得るのです。その上で具体的に NPO と協働する場合の注意点ですが、企業にとって NPO という存在はパートナーである一方で恐い存在でもあります。有名なナイキやリーバイスの児童労働問題、パナソニックのフロンガス冷蔵庫問題など、NPO が社会に対して訴えることで社会的制裁を受けた企業の事例は数多くあります。

NPO は企業と敵対したいわけではありません。しかし、社会的責任を果たさない、あるいは社会道義的に許されないことをしている企業に対しては、彼らの社会的役割として企業と対立します。したがって、NPO との協働においては、それぞれの社会的役割を理解した上で、馴れ合いではなく社会を良くするための信頼できるパートナーとして付き合いという距離感が必要です。その場合、逆に NPO 側も企業に対して成果や説明責任を含めた対応を求められるべきであり、相互に信頼しているからこそ生まれる緊張感の持続と共に事業を行っていくことが重要です。

日本ではまだ企業と NPO との協働は事例も少ないですが、これからさらに広がっていくことは間違いなく、それと共に企業にとって NPO の存在は重要性を増していくでしょう。

ろうきん森の学校10周年記念シンポジウム

# 10年間で11万人が参加した 『里山再生プロジェクト』

2015/2/12  
ろうきん森の学校全国事務局  
(NPO法人ホールアース研究所内)  
大武圭介

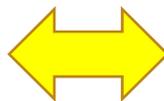
## 1. 開校の経緯

ろうきん森の学校＝労働金庫連合会50周年記念社会貢献活動

1) ろうきんと自然学校の特徴 ～目指す社会は同じ～



- 非営利の金融機関
- 勤労者のみならず、市民団体などのネットワークによって成立
- 経済のみならず、福祉・環境・文化に関わる活動を促進
- 人々が喜びと持って共生できる社会の実現に寄与する



共通・共感

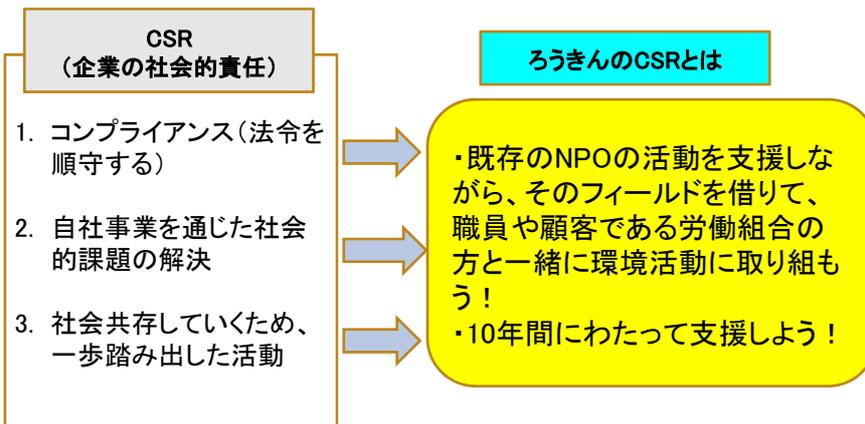
### 自然学校

- 子どもから大人まで幅広い層を対象
- 専門性を持った指導者、フィールド、実施できるプログラムを持つ
- 里山地域のみならず、都市部でも活動を展開する団体もある
- 持続可能な社会の実現を目指す

# 1. 開校の経緯



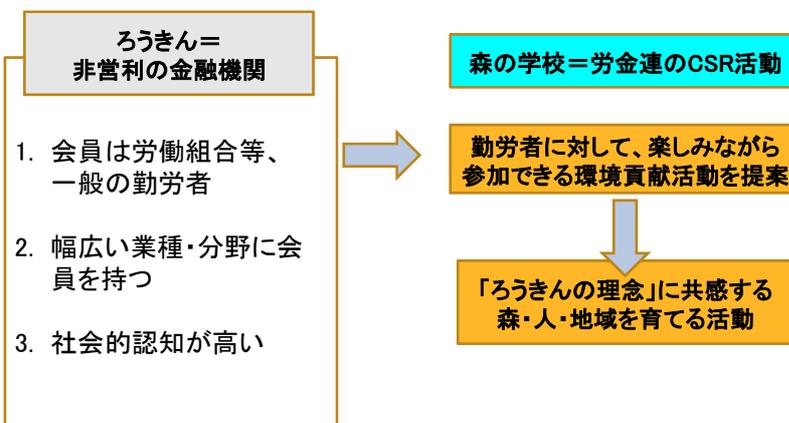
## 2) なぜ「ろうきん」が森の学校に取り組むのか？



# 1. 開校の経緯



## 2) なぜ「ろうきん」が森の学校に取り組むのか？



## 1. 開校の経緯



### 3) 全国から3地区を選定

全国のモデルとなるべく、東日本・中日本・西日本から、自然体験活動の活動実績があるNPO法人と対象地区を選定

広島地区(西日本)

NPO法人ひろしま自然学校



福島地区(東日本)

NPO法人いわきの森に親しむ会

富士山地区(中日本)

NPO法人ホールアース研究所  
※全国事務局も兼ねる

5

## 2. 活動の概要



～4つのポイント～

- ① 豊かな森の再生～里山の再生～
- ② 人材の育成～森づくりから始める人づくり～
- ③ プログラムの開発～「循環型地域モデル」の発信～
- ④ 地域と共に行う～様々な関係者との協働～  
地域住民、地区ろうきん等、関係者の理解と支援を得ながら活動展開

6

## 2. 活動の概要



### ① 豊かな森の再生～里山の再生～

荒廃した人工林、二次林を除間伐し、美しい森を再生しています



人工林の間伐(富士山地区)



植林後の下刈(広島地区)

7

## 2. 活動の概要



### ② 人材の育成～森づくりから始める人づくり～

森林を活用した自然体験活動指導者の育成の他、活動を通じて関係者の環境意識醸成にも取り組んでいます



自然体験リーダー養成講座(福島地区)



地元ろうきん職員研修でも活用(広島地区)

8

## 2. 活動の概要

### ③ プログラムの開発～「循環型地域モデル」の発信～ 楽しみながら里山の自然・地域の知恵を学べるプログラムを実施中



休耕田に小麦を播き、小麦を収穫してパンを焼く「小麦プロジェクト」(広島地区)

9

## 2. 活動の概要

### ④ 地域と共に行う～様々な関係者との協働～ 地域住民、地区労金など関係者の理解と支援、協働により活動を展開



広島県労働者福祉協議会主催の森林ボランティア作業を実施。  
写真は終了後のバーベキュー風景。



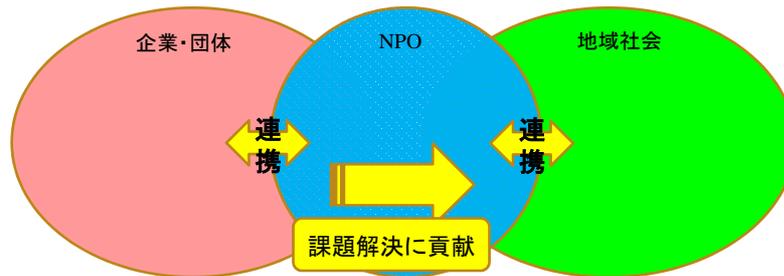
田貴湖エリアで恒例となっている「田貴湖秋まつり」。地元猪之頭地区の協力も得て開催。

10

### 3. 森の学校の社会的背景



ろうきん森の学校＝  
企業・団体×NPO×地域社会の連携による  
課題解決の試み



11

### 4. 森の学校の特色



- ① 「森づくり」から、「人づくり・地域づくり」につなげる自然学校活動  
体験的な手法、森の魅力を実感できるプログラムがメイン。  
活動を通じて、都市部からの交流人口を増やし地域活性化に寄与。
- ② 現地NPOが主導する「地域主体型」活動の定着  
基本方針は全国共通。活動は地域の実情に合わせた柔軟な展開。短期間に成果を焦らず、10年間という長期に亘った活動の定着を重視。
- ③ 支援団体関係者への体験プログラムを通じた「環境マインドの醸成」  
支援団体関係者(ろうきん関係者)への研修プログラムを積極的に実施。  
自然体験でリフレッシュ、身近な環境問題の実感、チームワークの醸成など、参加者が様々な「森の学校」効果を実感。

12

## 5. これまで10年間の成果



### ① 活動拠点の整備と推進体制の構築



完成した研修施設「こぞってハウス」(広島地区)



遊歩道を皆で整備(福島地区)

開始から3年間の立ち上げ期間で集中的にインフラ(遊歩道・キャンプサイト・資材小屋等)を整備

## 5. これまで10年間の成果



### ② 自然体験プログラムの開発

～アウトドアから郷土料理づくりまで幅広く～



対象地の中心・万代池でのカヌー体験(広島地区)



地元の方を講師に伝統料理づくり(富士山地区)

各地区の特色を活かしたプログラムが充実。カヌー、アウトドア料理の他、休耕田を活用した食農プログラムも開発

## 5. これまで10年間の成果



### ③ 活動の認知 ～広報・情報発信～



活動の様子を伝える「森の学校だより」通算35号を発行。



静岡県主催の森林CSRフォーラムにて活動事例を発表(富士山地区)

広報紙・WEBの独自メディアの他、地元記事掲載や地区労金店舗での広報など、活動が着実に地域に認知されつつあります。

## 5. これまで10年間の成果



### ④ 地区ろうきん、学校等地域との連携促進



中国ろうきんの新人職員研修での枝打ち体験(広島地区)

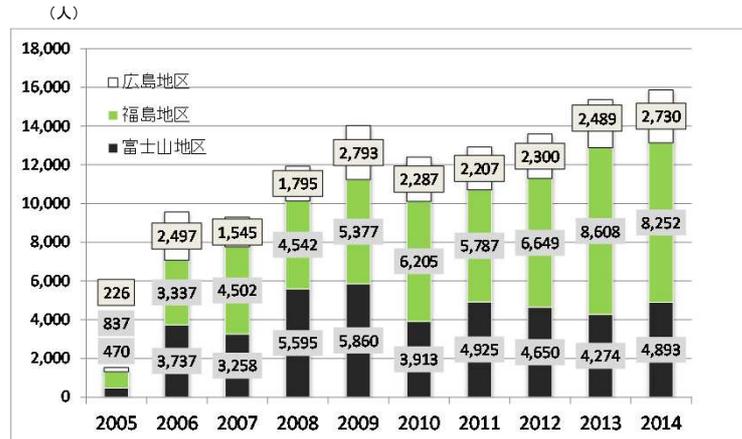


地元小学校の校外学習での森の学校利用(福島地区)

## 5. これまで10年間の成果



2006年度より活動が本格化し、1万人以上が毎年プログラムに参加



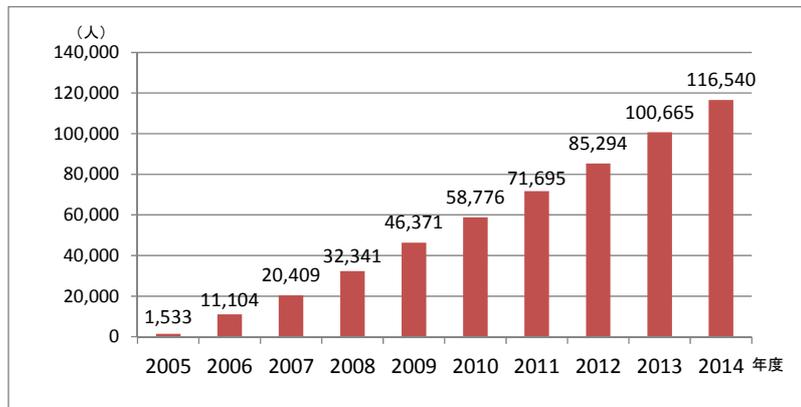
17

NPO法人ホールアース研究所

## 5. これまで10年間の成果



2014年度まで10年間で3地区を合わせて、のべ11万人を超える方が森の学校に参加



18

NPO法人ホールアース研究所

ろうきん森の学校  
継続が決定！

- ①2015－2024年(10年間)
- ②3地区から5地区に拡大  
(新潟、岐阜が追加)

# ろうきん森の学校 10年間の成果

【福島地区】  
NPO法人いわきの森に親しむ会

## 対象地の概要

**湯ノ岳エリア**  
総合的な自然  
体験活動の拠  
点フィールド



**21世紀の森エリア**  
山火事跡地の再生整備  
を通して森づくり体験が  
できるフィールド

**岩出エリア**  
昔の田んぼ、畑、  
溜池、神社、雑  
木林が残り昔の  
里山での体験が  
できるフィールド

## 対象地の整備実績①

40~50年間放置されていたかつての薪炭林(湯ノ岳エリア)を森の学校のフィールドとして整備

管理道路  
3m幅500m



観察コース  
3コース1200m



森の工房



備品倉庫



## 対象地の整備実績②

炭窯(木炭用、竹炭用)



石窯



放置されていた

畑の再生

900坪

田んぼの再生

200坪

## 10年間の実績

### 1) 地域環境への貢献

・植林、森林整備した面積

①湯の岳エリア 6ha      ②岩出エリア 3ha

③21世紀の森エリア 5ha

・確認された動植物種

①哺乳類 9種類(湯の岳エリア)      ②鳥類 33種類(湯の岳エリア)

③昆虫 甲虫 310種類(湯の岳エリア) 蝶 56種類(湯の岳エリア)

④植物 草本 290種、木本 140種類(湯の岳エリア)

・湯の岳エリア以外に整備した観察コース

地元小学校2ヶ所 1,100m、大学 1,000m

戸渡地区 800m、岩出地区 1,000m

21世紀の森地区 1,100m

## 10年間の実績

### 2) 里山活用への貢献「ろうきん森の学校自然体験活動」

湯の岳エリアで毎月1回開催しているもの。

自然観察会、野外料理体験については毎回実施するほか、

森の手入れ体験、農作業体験、森林療法体験、ネイチャークラフト、炭焼き体験、山野草勉強会、キノコ勉強会、ソバ打ち体験を加えたプログラム。

対象は会員を含む一般市民



## 10年間の実績

### 2) 里山活用への貢献「21世紀の森育樹祭」

平成9年1月に山火事になった場所の再生整備を平成15年より実施しているが、地域の子どもを中心に毎年12月の育樹祭に参加してもらい、自然観察会と下草刈りを行う中で、森のことについて学んでもらっている。



毎年100名前後の参加者がある。

## 10年間の実績

### 2) 里山活用への貢献

#### 「いわき明星大学自然体験プログラム研修会」

いわき明星大学キャンパス内の雑木林を学生とともに整備したフィールドを中心に自然体験プログラム研修会を支援



## 10年間の実績

### 2) 里山活用への貢献

「小学校を中心とした学校に対する環境教育支援」

小学校とその周辺の里山をフィールドにおいて教師が行う自然体験活動を中心とした環境教育の支援を実施



2013年度の実績は12校を対象に延1,629名のものを延424名のスタッフで対応。

## 10年間の実績

### 3) 人材育成への貢献

・約200回実施、参加者数は約4,300名

・テーマ例

いわき自然案内人養成講座、自然体験活動リーダー研修会、自然観察および自然体験活動プログラム勉強会、NACS-J自然観察指導員講習会、木育教育指導者養成講座、森づくり安全技術・技能研修会、チェーンソー・刈払機取扱者研修会

・関連資格取得実績(本会が共催者となり実施したもの)

・NACS-J自然観察指導員 44名

・労働安全衛生特別教育等修了証

刈払機取扱作業教育 192名

伐木等(大径木) 155名

・全国森づくり安全技術・技能習得者

ランク2 11名      ランク3 1名

## 10年間の実績

### 3) 人材育成への貢献

#### ・参加者の声

ろうきん森の学校の行事に参加したことがキッカケで2006年1月に入会し満8年になりました。

この間、いわき自然案内人養成講座、福島もりの案内人養成講座、環境教育指導者研修会、木育教育指導者研修会、刈払機・チェーンソー作業取扱研修会、福島グリーンフォレスター養成講座を受講しました。

5年前に会社を退職してからは、会の活動に積極的に参加して、先輩の指導を受けながら取り組んできた結果、今ではなんとか森林整備と木育教育活動のリーダー役ができるようになりました。

#### ・事務局コメント

- ①自然観察指導員、森づくり担い手の育成についてはなんとか達成できたが、高齢化に伴う問題も散見されるようになってきており、そのための対策が必要になっている。
- ②現在、木育教育指導者の養成に重点をおいて取り組んでいるが、これを加速させていくことが求められている。

## 10年間の実績

### 4) 地域での連携実績

年度	労福協関係		地区労金・労金友の会		計	
	回数	参加者数	回数	参加者数	回数	参加者数
2007	2	58	1	14	3	72
2008	3	104	1	12	4	116
2009	5	241	2	75	7	316
2010	4	146	2	103	6	249
2011	2	64			2	64
2012	2	62			2	62
2013	1	31	1	36	2	67
2014	2	49	2	53	4	102
計	21	755	9	293	30	1,084

- ・ろうきん森の学校自然体験のプログラムの内容をベースに相談の上実施している

## 10年間の実績

### 4) 地域での連携実績

常磐湯の岳生産森林組合・元組合長 高木定義氏(開校時の組合長)

利用が少なく休荘状態だった湯の岳山荘を自分達が管理していた時よりも数十倍も利用されるように改善され、地元の住民としても喜んでいきます。また、周辺の里山の環境も良くしてくれた上に、放置して藪化していた笠石の畑もみごとに復旧して、以前よりも良くしてくれてありがたく思っております。

最近では送付してもらっている「会報ヤマザクラ」により皆様の活動状況がよく分かるようになりました。私も4月以降は暇を作ることができるようになりましたので、時々参加させてもらいたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

## 10年間の実績

### 4) 地域での連携実績

いわき連合事務局長 大越伸氏

自然豊かな「ろうきん森の学校」の場を利用して、組合員の学習会、研修会ははじめ様々な取り組みを実施してきた。

「ろうきん森の学校」は多くの組合員の交流の場となってきた。

2011年3月発生 of 東日本大震災、原発事故以降活動は停滞してきているが、当地域における放射線量は落ち着いてきているので、今以上に「ろうきん森の学校」を利用して活発な活動を行っていききたい。

具体的には、組合員の学習会、研修会は勿論であるが、特に若手組合員を中心に「自然」を題材にした勉強会を行い、心豊かな将来を担う組合員を目指した場にしていききたい。

## 10年間の実績

### 5)総括

- ①活動開始後約3年の経験しかなかった本会がなんとか 森林整備、森林環境教育支援、各種自然体験活動において地域において頼りにされる存在になってきていることは、2005年からの「ろうきん森の学校」の活動によることが大きい。富士山地区、広島地区から多くの事を学ぶことができたことと資金面の支援があったことによる。

また、2011年の東日本大震災後の復旧、復興にあたっては、富士山地区、広島地区メンバーから多くの支援を受けた。とくに、広島地区メンバーからは「まち物語紙芝居化プロジェクト」の形で福島県全体で現在も支援を受けている。

## 10年間の実績

### 5)総括

- ②湯ノ岳エリアを中心とした活動基盤が整備されたことに伴い、いわき市内の森林ボランティア団体や環境団体が本会の団体会員として加入し協働で取組むケースが増加してきた。

団体会員名	事業名
NPO法人いわき竹プロジェクト	プロ野球の森整備
いわき市青年林業会議所	海岸林整備
NPO法人トチギ環境未来基地	海岸林整備、避難者支援
岩出の郷里山クラブ	いわき金成公園の整備と各種里山体験活動
NPO法人いわき環境研究室	川と海の観察会事業、環境教育プログラム作成
生協パルシステム福島	食育、木育等

## 10年間の実績

### 5) 総括

- ③湯ノ岳エリアの地権者である常磐湯ノ岳生産森林組合に対して、本会から林業再生プランによる森林整備を働きかけた結果、260haの所有林の森林経営計画を福島県担当者等の協力のもと作成することができた。

その後、森林経営計画に基づき本会が森林組合の代理人となり林業事業体に働きかけ、平成24～26年度の3年間で約90haの間伐を実施し、間伐材の販売代金の一部を森林組合の収入にあてることができた。

## 11年目以降の目標と課題

### (目標)

- ・国土の1/300、神奈川県1/2と広い面積をもついわき市において、多くの市民を本会のフィールドのみに参加してもらうことは難しいので、市内各地に自然体験活動の拠点作りを働きかけていきたい。

その中で湯ノ岳エリアを市内各拠点のセンター的なものとして機能できるようなものに内容の充実強化を図っていく。

- ・地元の木で家をつくることを含め木を使うことが健全な森を作るために大切なことであると言われており、そのための取組みにチャレンジしていきたい。

そのための一つとして行政、森林組合、木材業者、森林ボランティア団体等へ呼びかけ、地元の木を使っていくことを促進するための団体の立上げを働きかけていく。

### (課題)

- ・湯ノ岳エリアが東北の最南端に位置することと公共交通のアクセスが良くないこともあり、労金関係の参加者はいわき市中心になっている。

今後は北関東地域メンバーへの働きかけとニーズの適切な把握が求められている。

ろうきん森の学校

## 10年間の成果（富士山地区）

NPO法人ホールアース研究所



 ホールアース自然学校

### ・主な活動:

#### 1) 自然体験プログラム

※キャンプ・エコツアー・修学旅行・総合学習・  
健康増進・放置竹林整備・人工林間伐・食育

#### 2) 企業の環境活動・社員研修支援

#### 3) 行政事業の受託 ※環境・農林・教育・観光・経産分野

#### 4) 国際協力 ※エコツーリズム支援、環境教育支援

#### 5) 農林業

#### 6) 災害復興支援

・設立: 1982年

・スタッフ数: 35名（平均年齢: 34歳くらい）

・組織形態: 株式会社およびNPO法人

・拠点: 富士宮市、名護市など

Whole Earth Nature School

- ・スタートは、  
家畜動物との暮らしの実践、「動物農場」。
- ・やがて、動物と共に富士山麓でおもいきり  
遊ぶ「遊牧民キャンプ」が大人気に...



## 健康増進



## 【10年間で特に力を注いだこと】

- ① 体験プログラムの「活動地整備」
- ② そこを活用した「体験プログラムづくり」

## 2. 活動地整備の実績



柚野エリアの整備前後。  
「森の学校」を象徴する学習エリアとして整備が進んだ。整備後、年間千人単位の参加者を迎え入れている。

## 2. 活動地整備の実績



田貫湖エリアの整備前後。  
手入れが必要な人工林を  
地元労福協の協力も得な  
がら整備。光が差し込む森  
になった。

## 3. 里山体験プログラム①「里山つなぎ隊」

参加募集型作業プログラム。地元の方、学生、都市在住の里山  
に興味のある方を対象に竹林整備を毎月1回(1泊2日)実施。



竹伐採だけでなく、竹の子掘りや門松づくりなど、季節に応じた  
里山の文化もプログラム要素に含んでいる。

### 3. 里山体験プログラム② 「里山のようちえん」

富士山麓で繰り広げられる食育プログラム。年間を通じ、畑と田んぼのワークを中心に、親子のふれあいを大切にしながら展開。



このプログラムを機に、家庭での食生活に大きな変化をもたらした家族も多い。

### 3. 里山体験プログラム③ 「森と暮らしの講座」

森と人の暮らしのつながりを実感するプログラム。大工の棟梁の指導のもと古民家を再生しつつ、森林整備活動、きこりとの交流の機会から多くを学ぶことができている。



古民家再生そのものをプログラム化。参加者は、その過程だけでなく、完成後の活用イメージも膨らませながら作業にあたる。

### 3. 里山体験プログラム④「田貫湖秋まつり」

地域住民を中心に、田貫湖を訪れる方々に対して森に親しみながら森の重要性および環境保護について理解を深めてもらうことを目的とするイベント。



毎年数百人単位の参加者がある。「ろうきん森の学校」の地域内周知の一役を担うイベントでもある。

### 4. 地域での連携実績(例)

(表)地域の労金関係者との連携事例

年度	内 容	人数
2009	静岡県労働金庫富士宮支店30周年記念イベントを実施	900
2011	静岡県労働金庫の新人研修	30
2013	富士宮地区労福協による人工林整備(2回)	32
	富士地区労福協による竹林整備	24
2014	静岡県労働金庫の新人研修	13
	富士宮地区労福協による人工林整備を2回実施	35
	恒例の「ろうきん田貫湖秋まつり」を県とコラボし、拡大実施	300

## 5. 総括①

- ①活動基盤が充実し、森を活用した体験活動が深化。「楽しい」だけでなく、参加者の行動変容につながるプログラムの提供が可能になってきている。
- ②地域の農林家・職人などがプログラム講師役となる機会が増加している。
- ③地域の自然生態系が質的に向上している。

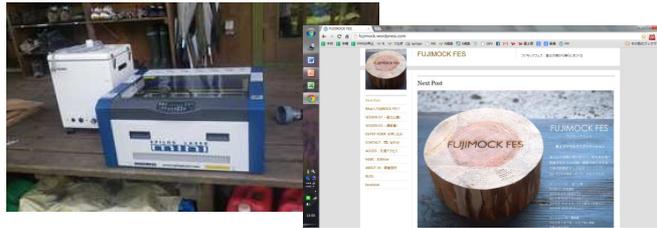
## 5. 総括②

- ④これまでに約40,000名の参加者を受け入れた。その中には自身で新たに森づくり活動や、森林環境教育指導などに踏み込む人も現れている。
- ⑤地元企業や労働組合等と連携した取り組みが進展している。特に、毎年秋の祭り実施や、人工林の管理作業、竹林整備と関連イベントは、継続的な活動として定着しつつある。

## 6. 11年目以降の目標と課題

### 【目標】

- ・森林や木材の高付加価値化、間伐材利用の促進を地域連携の枠組みで実施していく。
- ・先駆的なモデルを構築することで、他地域への転活用を目指す。



- ### 【課題】
- ・地域内関係者の連携を、より一層深める。
  - ・年代や得意分野を超えた「つながり」強化。

# ろうきん森の学校10年間の成果



広島地区  
NPO法人ひろしま自然学校

## 1 対象地の概要

### ゾーニング

○ は一部未整備エリア



## 2 対象地の整備実績 (基盤整備-施設系)



### 【整備実績】

研修施設、作業小屋、物置、トイレ、炊飯台、シンク、焚き火場、ピオトープ、タタラ跡、石窯、井戸、浄化槽

## 2 対象地の整備実績 (基盤整備-散策路)



### 【整備実績】 約5.5km

万代池周回コース：1km、展望エリアー帯：2km、森林学習ゾーンー帯2km、里山再生ゾーンー帯：0.3km

## 2 対象地の整備実績（森林整備）



**【整備実績】 約8.0ha**

**人工林：スギ（30年、50年）、ヒノキ（30年）**

**雑木林：アカマツ、コナラ林**

## 3 10年間の実績（里山活用への貢献）

### ●森の妖精くらぶ



**未就学児童と保護者を対象に森の幼稚園を開催。わらべ唄、森の妖精からの手紙などを駆使して、子どもが夢中に遊ぶ環境とカウンセラーによる保護者の子育て相談を実施。**

### 3 10年間の実績 (里山活用への貢献)

#### ●わくわく探検隊



小学4年生から6年生を対象にした通年の子どもキャンプ。自然体験、農業体験、環境学習などをベースに年間を通して同じグループで過ごすことで、子どもたちのチーム作りを大切に実施。

### 3 10年間の実績 (里山活用への貢献)

#### ●夏の分校1/2ヶ月



小学4年生から中学3年生を対象にした14泊15日の子どもキャンプ。小学校の廃校を拠点に、「じっくり暮らす・とことん遊ぶ」というコンセプトで、子どもたち自身がキャンプをつくり・運営するしくみで実施。

## 3 10年間の実績（里山活用への貢献）

### ●アースキーパー・プロジェクト



アメリカで生まれた環境教育「アースキーパーズ」のプログラムを日本で唯一実施。小学校5年制を対象に3ヶ月間に渡る環境教育のトレーニングを実施。

## 3 10年間の実績（里山活用への貢献）

### ●小麦プロジェクト



森の学校周辺の耕作放棄地を借用して、小麦を植える、育てる、収穫する、製粉する、料理して食べるという生産から消費までを体験する食育プロジェクト。

## 3 10年間の実績 (里山活用への貢献)

### ●森のカフェ



家族を対象に、春夏秋冬を通じて旬の食材を使ったアウトドア料理教室を開催。食を通して自然と親しむ活動を展開した。

## 3 10年間の実績 (里山活用への貢献)

### ●大人の自然学校



大人が自然や環境について考えるための時間、大人の自然学校を開催。

## 3 10年間の実績 (里山活用への貢献)

### ●森の学校フェスティバル・コンサート



年に1回、森の学校を開放して多くの市民に森の学校を知ってもらうためのイベントを開催。

## 3 10年間の実績 (人材育成への貢献)

### ●人材育成



学生ボランティア、コミュニティ・ワーカー、アースキーパートレーナー、森林整備ボランティアなどの養成を実施。

### 3 10年間の実績 (企業との連携実績)

#### ●企業との連携

中国労金、労福協、地元企業と連携して、新入職員研修、森林ボランティア活動などの受け入れ。



### 3 10年間の実績 (地域との連携実績)

#### ●地域との連携



年1回の対象地の草刈り、地域の行事への参加

### 3 10年間の実績（地域環境への貢献）

#### ●動植物調査データの蓄積



定期的な動植物調査と調査結果の公表。森の学校フェスティバルなどを利用して森の博物館をオープン。

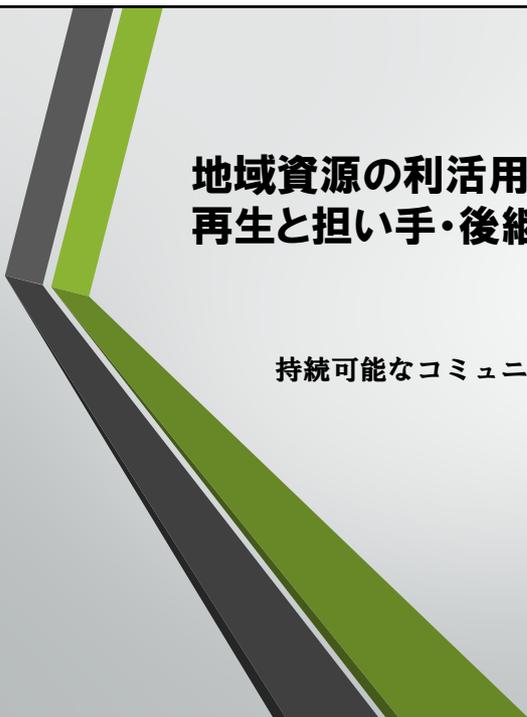
### 4 11年目以降の課題

●フィールドの拡大

●地域・企業との連携強化

●体験・学習プログラムの開発

●里山を活用した仕事



## 地域資源の利活用による持続可能な過疎集落 再生と担い手・後継者の育成

持続可能なコミュニティへの決め手とは・・・

### ミッション ～使命・役割～

- ふるさとで安心して  
生活できる社会にする。

現代社会において、高齢化や過疎化による地域コミュニティの衰退や若者の都市への流出が止まらない状況にあります。私たちは、豊かな地域資源(人・文化・自然)を生かして地域に元気を取り戻します。ふるさとを離れて行った人たちがまた戻ってきたいと思える地域と、安心して戻ってきて生活できる社会を目指します。

## ビジョン

～目標・方向性～

- 地域資源を活用した自立・持続可能な  
仕組みを構築し、それを波及する。

地域に住む人たちやボランティアと協力しながら地域資源を再生・利活用することで、地域資源を「守り・育み・使う」という循環型社会を目指します。その地域再生の仕組みを同じような課題を抱えている地域へ伝えていきます。

## 3本の柱

魚沼伝習館では、青少年育成事業、地域づくり事業、環境事業を行っています。

青少年育成事業は将来の地域を担う子どもたちの育成を行い、地域づくり事業は若者が安心して地域で生活することができる社会をつくり、環境事業は子どもたちの環境学習や自然資源の保全と再生を行います。人材の育成とともに地域の活性化、自然の再生を連携して進めることで、より良い社会づくりにつながると考えています。

### 地域づくり事業

地域で育った若者が、安心して生活できるための地域社会づくり

### 青少年育成事業

地域に愛着を持ち、社会で力強く生き抜くことのできる子どもたちの育成

### 環境事業

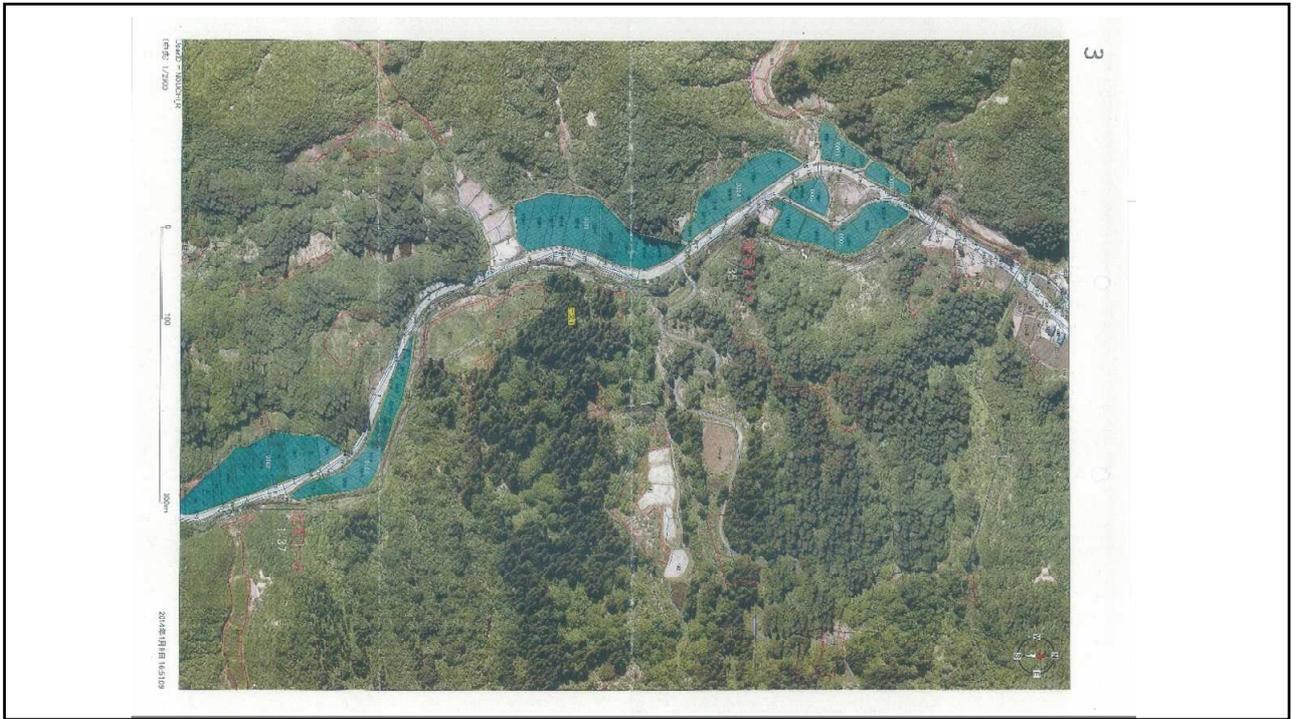
自然資源の保全・再生を行いながら人材を育成

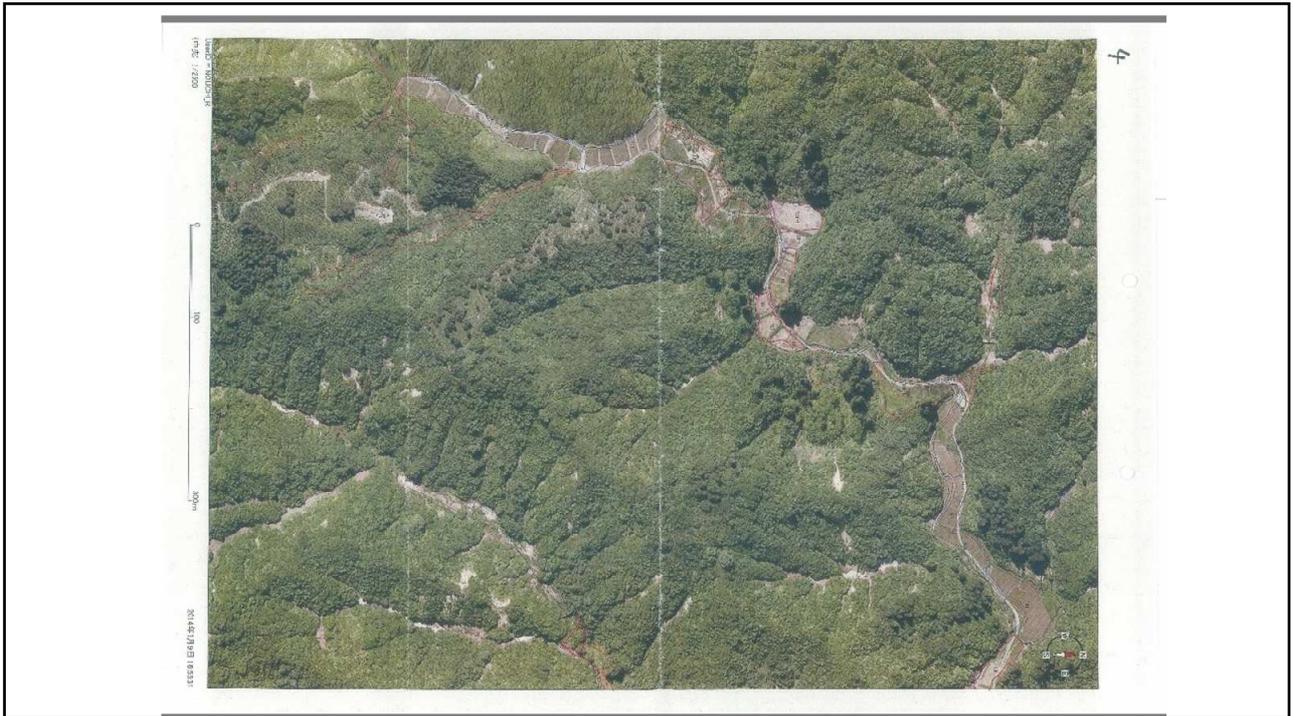
### 過疎集落の現状

- 中山間地域のため1農家当たりの耕作面積が5～8反歩程度と経営面積が小さい
  - 農家の収入の柱にならず、結果的に兼業農家が大半
  - 減反政策と相まって耕作面積が減少
- その結果進む高齢化と担い手不足、地域の荒廃＝限界集落の出現
  - ・休耕田、耕作放棄地の急激な増加
  - ・里山、山林の荒廃
  - ・農業従事者の減少
  - ・少子高齢化と域外流失による担い手・後継者の減少
- 旧態依然とした流通による弊害
  - ・定額買い取り・統一的な単価設定
    - 生産者の創意工夫とは無関係に価格が決まるため品質改善のインセンティブなし
    - 創意工夫した生産者がいても品質が均質化され、消費者に成果が伝わらない
  - ・低い収益性
    - 旧態依然とした流通の結果、生産者の卸価格が低く設定
    - 農業機械、肥料などの生産コストが高く生産者の負担が大きい

辻又集落とは  
 H25年5月 H26年10月 減少率  
 人口51名 45名 88%  
 世帯数18軒 16軒 88%  
 平均年齢59, 63歳 60, 28歳  
 後期高齢者 5世帯  
 農業収入 53万円／一世帯平均／年  
 水田面積24町歩(最大)現在8町歩  
 山林面積???







耕作放棄地の一例です。  
既に雑木が生えており、米作りができる田んぼに戻すには数百万円の費用が掛かります。



限界集落化が進むと森も荒れ放題になります。  
数十年も手入れがされない杉林……この杉一本一本が税金をかけて植えられました。たぶん戦後に植えられたものと思われる。



限界集落の代表例です。  
数年前まで石垣の上には人家があったようです。今は山菜の繁殖地と化しています。

.....取組状況.....

◆未利用資源(休耕田・耕作放棄地)、荒廃資源(山林)等の経済価値化可能性調査

- ①原稲作面積24町歩のところ現在8町歩を耕作、休耕地16町歩の状態調査と改修可能性を長中短期の改修可能性あるいは放棄の判断を行う。
- ②今年度から山林については共有林部分の境界確定および除間伐による林内整備及び森林研究所の指導による林産物栽培。
- ③南魚沼地域振興局農林振興部と連携し改修圃場での耕作物の検討、試験栽培等を行う。

◆担い手・後継者の育成

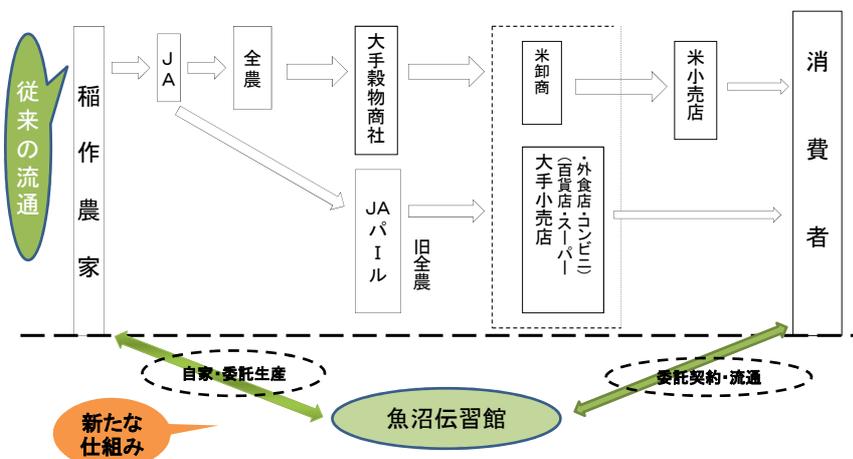
- ①集落の後継者(若手)4名及び当NPO職員2名を選抜しコアメンバーとして活動、地域再生の可能性検証及び活動主体として行動する。
- ②都市部の地域再生に関心のある若者、企業(CSR)を中心に資源改修、耕作をOJTで行い再生可能性を体験と共に地域への関心度を高める。(大学との連携3校、企業4社)

◆販路開拓と市場の形成

- ①新潟県産米(魚沼産コシヒカリ、コシブキ)を飲食関連、ホテル、企業等に販売しており平成26年度は米の販売目標を20,000千円以上とし市場開拓を行う。
- ②改修圃場の生産物については、コメの販売先を中心に市場のニーズと耕作可能性商品とのマッチングを行い生産し市場の形成を図る。

◆魚沼伝習館の新事業の狙い

魚沼伝習館としては、「魚沼産コシヒカリ」の生産農家と企業、団体、個人等とを仲介することで、両者にとってWinWinの取引関係を構築したいと考えています。





### 水田の改修研修

慣れない手つきで休耕田を刈り払い機で除草している  
研修生



### 山林整備(辻又地区共有林)

IT企業、学生たちと連携してボランティア活動として山林の整備を行う。  
将来…自然栽培による林産物の栽培



### 地域との交流

集落の運動会に参加 当日は南魚沼市の市長も参加、大学生が20数名参加して村始まって以来にぎやかな運動会と言われました。と市長が(#^.^#)

### 今後の計画

#### ● 第1フェーズ(2015-16)

- ①活動エリアの作業路整備
- ②看板の設置
- ③木材加工施設の建設

#### ● 第2フェーズ(2017-20)

- ①遊歩道の開設
- ②環境学習フィールドの整備
- ③キャンプ場・研修施設の整備
- ④林産物栽培エリアの整備
- ⑤活動エリア内の水場・トイレ整備

#### ● 第3フェーズ(2021-24)

- ①自然体験エリアの拡張整備
- ②環境学習エリアの拡張整備
- ③林産物栽培エリアの拡張整備



## ろうきん森の学校 岐阜地区

2015年2月12日

NPO法人  
緑グリーンウッドワーク協会

## 沿革

全国初の森林教育・学習専門機関

2001年 岐阜県美濃市に開校

2008年 グリーンウッドワーク協会NPO認証



人と自然をつなぐ学校

岐阜県立 森林文化アカデミー



グリーンウッドワークとは

「人力の道具を用い、  
生の木を削って  
小物や家具をつくる木工」

のことです。

## グリーンウッドワークの良いところは？

①どんな木だって材料になる

間伐材、庭の手入れで伐った枝…身近な資源を使えます

②場所を選ばず、どこでもできる

グラウンドの真ん中でも、森の中でも可能です

③地球にも人にもやさしい

電気や石油を使わないので環境に優しく、作る人の心も体も健康に

④子供も大人も安全に楽しめる

高速で刃物が回らないので危険がありません

⑤森と人がつながれる

森の生きた木が暮らしの道具に早変わり、森と人との距離が縮まります

## どんな作品が作れるの？



↑木の指輪

↓木のスプーン



漆を塗れば本格的な器に！



木の花

## ゴッホの椅子



ラダーバックチェア



美しい椅子が6日間で完成します

## どんな道具を使うの？



足踏みろくろ



削り馬



作るものに応じて  
さまざまな刃物を使います

# グリーンウッドワークは どんどん広がっています！

ニーズに合わせてプログラムを提供

里山整備

NPO法人いわきの森に親しむ会  
(福島県)

里山整備と組み合わせた  
ものづくり講座

(国土緑化推進機構・緑の募金)



福祉

NPO法人岐阜羽島ボランティア協会  
(岐阜県)

障がいを持つ子と持たない子の交流活動

(JT NPO助成)



家具産業

飛騨木工連合会  
(岐阜県)

大手家具メーカーの職人研修



木育

木育ファミリー(北海道)  
地域における木育の拠点づくり

(コープ札幌 未来の森づくり基金)



アート

札幌芸術の森(北海道)  
ゴッホの椅子づくり



(札幌芸術の森 主催事業)

環境

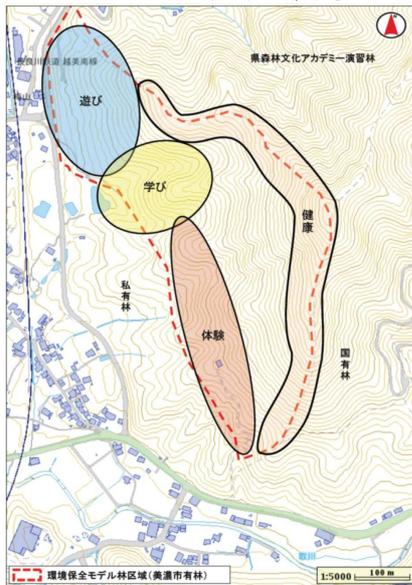
京エコロジーセンター(京都)  
グリーンウッドワーク指導者養成講座



# ろうきん森の学校(岐阜地区)



## 美濃市古城山環境保全モデル林 2014年6月美濃市が整備



広さ約18ha 広葉樹、アカマツ、ヒノキ、モウソウチクなどの林

## 美濃市新田の森



標高約700m(中間温帯) 広さ約6ha 中山間地域の林業団体と連携

そして2015年4月

岐阜県美濃市にて

# ろうきん森の学校

が始まります。

参加費無料



ろうきん森の学校 10 周年記念シンポジウム

富士山・福島・広島 の 3 地区で「森・人・地域」を育てる 10 年間のプロジェクトの軌跡と未来

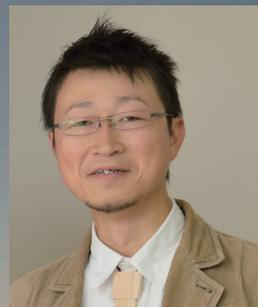
# これからの CSR を考える<sup>2</sup> / 2015 12 (木)

～企業と NPO が目指すべき協働のあり方～

【基調講演】

**牧 大介氏** (株式会社西粟倉・森の学校代表取締役)

ローカルベンチャーが地域を変える



牧 大介 (まき だいすけ) 氏

1974 年生まれ。京都府宇治市出身、京都大学大学院農学研究科卒業後、民間のシンクタンクを経て 2005 年に株式会社アマタ持続可能経済研究所の設立に参画。2009 年より株式会社西粟倉・森の学校を設立と同時に代表取締役就任。

【ろうきん森の学校 活動報告】

富士山・福島・広島  
それぞれの 10 年間と次の 10 年に向けて

【パネルディスカッション】

これからの CSR を考える

～企業と NPO が目指すべき協働のあり方～

牧 大介氏

(西粟倉・森の学校代表取締役)

志賀誠治氏

(ひろしま自然学校代表理事)

町井則雄氏

(日本財団総務部企画推進チームリーダー)

糸谷元志氏

(労働金庫連合会総合企画部長)

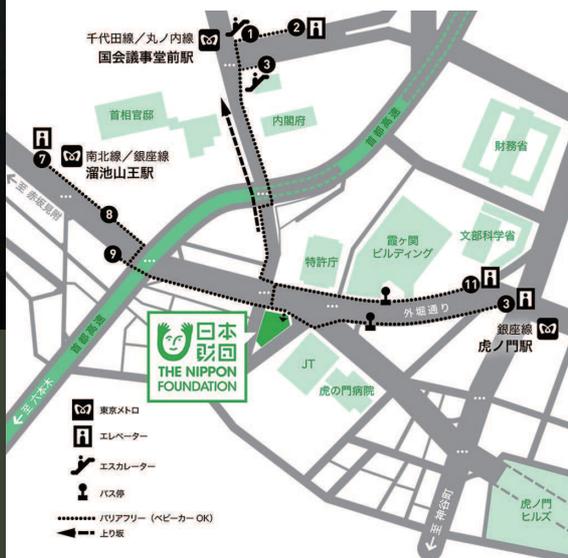
コーディネーター 田中 啓介

(NPO 法人ホールアース研究所)

《会場》

日本財団ビル 2F 大会議室

会場詳細：東京都港区赤坂 1 丁目 2 番 2 号日本財団ビル  
東京メトロ銀座線：虎ノ門駅  
南北線・銀座線：溜池山王駅  
千代田線：国会議事堂前駅下車 いずれも徒歩 5 分。  
※会場に駐車場はございません。公共交通機関でご来場ください。



対象：企業 CSR、NPO 関係者・労金関係者・学生等

定員：100 名

主催 NPO 法人ホールアース研究所 / 共催 労働金庫連合会

協力 公益財団法人 日本財団

NPO 法人いわきの森に親しむ会

NPO 法人ひろしま自然学校

NPO 法人グリーンウッドワーク協会

NPO 法人野外教育学修センター魚沼伝習館

お申込み / お問い合わせはこちら

ろうきん森の学校全国事務局 (NPO 法人ホールアース研究所内)

TEL : 0544-66-0790

FAX : 0544-67-0567

mail : forest@wens.gr.jp

## スケジュール

時間	内容
13時00分～	受付開始
13時30分～	開催挨拶（労働金庫連合会 中江公人理事長）
13時35分～	基調講演（株式会社西栗倉・森の学校 牧大介氏）
14時30分～	ろうきん森の学校活動報告（富士山・福島・広島地区ならびに新規スタートする新潟・岐阜地区担当者より報告いたします）
15時30分～	休憩 ※5地区のブース展示をご覧ください
16時00分～	パネルディスカッション
17時00分～	閉会挨拶（ホールアース研究所 山崎宏代表理事）
17時05分	懇親会の案内、会場に移動
17時30分～	懇親会
19時00分	終了

### ろうきん森の学校とは…

日本の里山再生をテーマに、労働金庫連合会の50周年記念社会貢献活動として、NPO法人ホールアース研究所が主管で行う、森林環境教育事業です。

2005年度より10年間にわたり労働金庫連合会の協賛を得て、富士山・福島・広島の全国3地区で現地NPOが事務局となり活動しています。

2014年度までに3地区でのべ10万人以上が活動に参加しました。

労働金庫連合会は60周年記念社会貢献活動として、2015年度より2024年度までの10年間、新潟・岐阜の2地区を加えて、全国5地区で引き続きこの「ろうきん森の学校」の活動を支援することとしました。

## パネリスト略歴 ※牧氏除く。五十音順

### 糸谷元志（いとたに もとし）氏

労働金庫連合会総合企画部長。  
1959年兵庫県生まれ。1982年に全国労働金庫協会に入会、1990年労働金庫連合会に転籍。労働金庫連合会確定拠出年金部長、営業推進部長、財形部長を経て、2014年4月より総合企画部長。2007年度より「ろうきん森の学校」の2代目事務局を担当し、職員参加を促す各種制度づくりを担う。「ろうきん森の学校」の活動を愛し、毎年、多くの職員を引き連れたツアーを企画し、イベントに参加している。この10年間のイベント参加は役職員で一番多く、作業参加時の青いつなぎ姿がトレードマーク。



### 志賀誠治（しが せいじ）氏

NPO法人ひろしま自然学校代表理事  
1979年広島大学教育学部（教育学講座）卒業後、広島県内の公益法人に15年間勤務。  
1994年に独立し、人間科学研究所を設立。健康・環境・福祉・文化・地域づくりなどをテーマに、参画・協働のまちづくりや人づくりに取り組んでいる。  
また、広島県内中山間地の廃校を活用して自然学校を運営。子どもの自然体験活動や環境教育活動、環境教育指導者の養成活動などに尽力している。  
NPO法人自然体験活動推進協議会理事、NPO法人日本エコツアーリズムセンター理事なども務める。



### 町井則雄（まちい のりお）氏

日本財団総務部企画推進チームチームリーダー。  
企業との連携による本業を通じた社会課題解決に向けた事業づくりをはじめ、「未来を変えるデザイン展」などの企画展の企画・運営やCSRと社会貢献などに関する講演・執筆なども行っている。  
経産省 地域新成長産業創出促進事業審査委員、内閣府「新しい公共推進会議」情報開示・発信基盤に関するワーキング・グループ委員、G4マルチステークホルダー委員会委員、CSR検定委員等を歴任。  
著書（共著）「企業と震災（木楽舎刊）」など。



### 【参加申込書】

以下に必要事項を記入の上、FAX：0544-67-0567で送信してください。  
または必要事項を明記の上、E-mail：forest@wens.gr.jpで申し込みください。

FAX 0544-67-0567

氏名（ふりがな）	性別（男性・女性）	所属先（企業・団体・大学名など）
	年齢 歳	
連絡先（ビル・部署名等も明記してください）		
住所 〒 — (都・道・府・県)	区・市・町・村	
電話	FAX	
E-mail @	交流会参加の有無（17:30-19:00 無料） ・参加する                      ・参加しない	

## ろうきん森の学校 10 周年記念シンポジウム 報告書

発行：2015 年 3 月

編集：ろうきん森の学校全国事務局（NPO 法人ホールアース研究所内）

〒419-0305 静岡県富士宮市下柚野 165

TEL：0544-66-0790 FAX：0544-67-0567

E-mail：forest@wens.gr.jp